「城を歩く会」１０月定例会資料　　平成２２－１０－１９

織田信長「天下布武」の安土城を歩く

登城組ご案内時間１１０分（バス出発時間１２時５０分＝予定）
城下組（バス出発時刻１１時３０分ころ）

山岸弘明

織田信長

今回旅行最大のみどころは織田信長の「安土城」といえる。琵琶湖東畔に突き出た比高 100m余に立地、文字どおり「天下人」の城で、近世城郭の嚆矢とする。高い石垣を連ねた総石垣造り、５重７階の超高層天主、豪華で格調高い本丸御殿、楽市楽座に代表される城と城下は人知を超越した壮大さで、諸大名を服従させ、実質将軍をアピールするに十分であった。

＊

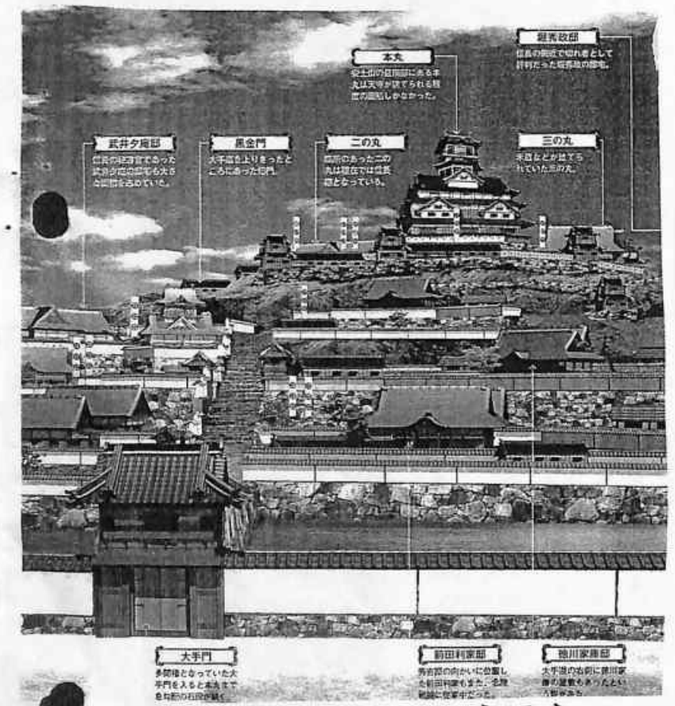
発掘調査によって復元された大手道は幅６ｍ、直線で長さ 130 ｍ続く。かつて両側に羽柴（豊臣）秀吉、徳川家康、前田利家ら重臣たちの屋敷が階段状に構えた。

登り切ると総石垣の主郭部分に出る。みどころは石垣だろう。近畿圏内の石積み経験者を総動員、担当石工それぞれが我流で積み上げたとみるべきだろう。「野ヅラ積み」から「打ち込みハギ」への移行期で、研究者間ではとくに「安土積み」（割り石積み）と区別する向きもある。今日の石垣が昭和40年代の前半の修復工事で大規模な積み直しが行われたため、現況が正しく盛時を伝えていないことにも注意が必要だ。

主郭は山頂の天主台を中心に本丸、２の丸、３の丸を配した変則梯郭式、天主台には礎石が残る。この上に外観５重地上７階、黄金に輝く巨大天主を上げた。信長は天主最上階の望楼から全国の形勢を読み取り「天下布武」を進めた。

＊

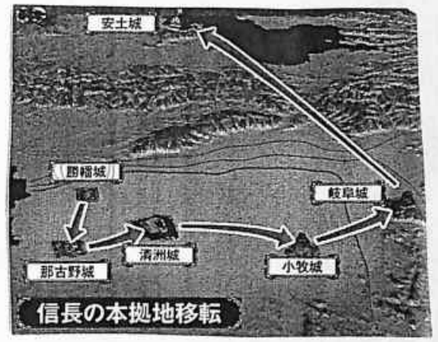
安土城は岐阜城にあった織田信長が天正４年、丹羽長秀の縄張りで着工、工事は「昼夜、山も谷も動くばかりに候（信長公記）」とする。天主は工事３年後に竣工した。しかし信長が安土城にあることわずか6年余にすぎない。天正10年６月、京都本能寺において明智光秀の襲撃を受けて志なかばで自刃。安土城は光秀の腹臣で娘ムコの明智秀満が占拠するが、「山崎の戦い」での敗報が伝わると坂本に退去、その後、安土に入った織田信雄が明智残党刈りのために放った城下の火が広がり、またたくまに燃え上がったという。信長の城らしい最後でもあった。



安土城（CG日本代シリーズから）

↓大手道

安土城天主



幻の名城を歩き、黄金に輝く天主望楼を見上げる

織田信長年表

天文３年1534	織田信秀の嫡男として誕生	
〃　10年1541	那古野城主となる	
〃　14年1545	斉藤道三の娘濃姫と結婚	
〃　17年1548	父急死し家督相続	
〃　22年1553	美濃で義父道三と初会見	
弘治元年1555	守護代織田家を倒し本拠を清洲城に移す	
〃　３年1557	実弟信行を清洲城で殺害	
永禄２年1559	尾張を平定する	
〃　３年1560	桶狭間の戦いで今川軍破る	
〃　５年1562	清洲同盟、徳川家康と結ぶ	
〃　６年1563	本拠を小牧山城に移す	
〃　７年1564	織田信清から犬山城を奪う	
〃　10年1567	斉藤龍興を滅ぼし、美濃を平定、本拠を岐阜城に移す	
永禄10年1567	妹市を浅井長政へ嫁がせる	
〃　11年1568	足利義昭を擁して上洛	
〃　12年1569	義昭の二条御所造営	
〃	キリスト布教を許可	
元亀元年1570	朝倉攻めで浅井家が寝返る 姉川の合戦で浅井、朝倉軍を破る	
〃　２年1571	比叡山焼き討ち	
天正元年1573	室町幕府滅亡、義昭を追放	
〃　３年1575	長篠の戦いで武田軍を破る	
〃　４年1576	安土築城開始、本拠を移す	
〃　10年1582	本能寺の変、自刃49才 安土城焼失	

中世城郭		近世城郭	
山城	→	平地	天下統一 中央集権制度への移行 政治の中心地、利便
戦う城	→	みせる城	天守の発達、権威の象徴 楽市楽座、城下町の発達 瓦葺き屋根、礎石建築
土の城	→	石の城	高石垣の発達 あら割り石、角石の利用 打ち込みハギへの移行 角あり、算木組のめばえ 石積み集団生まれる

縄張り　丹羽長秀

将軍？ 関白？ それとも……
信長が目指した権力の頂点

乱世を勝ち抜き、天下人の名乗りをあげた信長。彼が、名実ともに日本の権力の頂点に立とうとしていたことは、朝廷との官位をめぐるごたごたからも推測できる。

1577（天正5）年、信長の実力を認めた朝廷は、右大臣に任官したが、信長は翌年これを辞任。天下を狙う大勢力の信長が、何の官位も受けないということは、朝廷の権威を無視された形になるため、朝廷は、信長が武田家を滅ぼしたのを機に、1582（天正10）年、関白（かんぱく）でも太政大臣（だじょうだいじん）でも、望みの官位を与えることを提案。しかし信長は、この申し出に対してもはっきりとした返事はしなかったのだ。

フロイスの「日本史」に、「天皇より権力があるのは自分だ」と断言したという記録が残っていることから見ても、信長には、朝廷の与える官位は、もはや意味をもたないものだったのだろう。宣教師たちが「キング」という表現を使ったように、信長は全く新しいタイプの「日本の国王」を目指していたのかもしれない。

▼明治天皇により建立された、京都北区の船岡山にある建勲（たけいさお）神社。明治維新後、「従一位太政大臣」を贈られた信長が祭られている。

人間五十年、下天の内にくらぶれば　夢まぼろしのごとくなり

1）鳴かぬなら殺してしまえほととぎす —— プロローグは織田信長から

①織田信長＝武将に人気ランキングがあるとすれば間違いなく信長が第１位だろう。
「殺してしまえホトトギス」に例えられた信長像は短気でカンシャクもち、しかも冷酷残忍とされる。比叡山の焼き討ちや一族間の血で血を洗う抗争などエピソードは枚挙にいとまない。一方で、戦国乱世を怒濤のように駆け抜けた、その激烈の戦いとドラマは私たちの心をしっかりと捕らえている。

②信長は室町時代の終わり、尾張守護代家老の嫡男として誕生。父信秀から名古屋城の前身、那古野城を与えられたのはわずか８歳、有名なウツケは父の愛情不足が原因という。永禄３年今川義元の大軍を倒して勇名を天下に轟かす。この戦勝が天下雄飛の第１歩となる。徳川家康と結んで美濃に進出、足利義昭を15代将軍に奉じて上洛するが、ほどなく天下の実権をめぐって対立したので放逐。この間、岐阜城を本拠に畿内経営を進めた。比叡山を焼き討ち、武田勝頼を大いに破って、天正４年には安土に壮麗な大城郭を築いて居城とし中原制覇の基礎を固めた。この間官位も右大臣、正二位に進む。いまや信長に対抗する勢力は北陸の上杉、中国の毛利らに絞られていた。しかし信長の過激かつ冷酷な性格は一方で腹臣の怨恨を買うことにもなった。天正10年備中に出陣中の羽柴秀吉を救援するため自ら安土を出陣、京都本能寺に宿した６月２日明智光秀の謀叛にあって火中で自刃してはてるのである。戦国の群雄割拠を打破し、雄図空しく破れたとはいえ、「天下一統」の夢は、後継した豊臣秀吉によって叶えられる。信長の死は急展開しながら一気に近世を迎える。

明智光秀

伝武井夕庵邸の石垣（写真＝中井　均）◉屋敷地内でももっとも立派な安土城の石垣を見ることができる。

安土城の石垣―穴太衆・穴太積の幻影―

□記録にない「穴太衆」

安土城の石垣は「穴太衆（あのうしゅう）が積んだ穴太積（あのうづみ）」として紹介されることが多い。しかし歴史的には、安土城の石垣が積まれたころには、「穴太衆」という集団は存在しない。また、「穴太積」という流儀も存在しない。安土城の石垣が、穴太衆や穴太積によって積まれたという記録はどこにも存在しないのである。

ことの発端は江戸時代中期の新井白石である。彼は国学者で城の石垣を研究していたときに、安土城の石垣は江戸時代にいた城の技術者たちの先祖が築いたのではないかと考えたのであった。技術者たちは「公儀穴生方（こうぎあのうがた）」と呼ばれ、幕府の城の石垣積みを行っていた。新井白石の説を聞いた全国の職人達は、穴太という地名が全国にあるにもかかわらず、こぞって先祖が安土城の石垣を積んだ近江の穴太であるということを幕府に申し述べたのであった。

□石垣の技術を城に導入

安土城が築城される以前は城に石垣が導入されることはまれであった。当時、石垣の技術は武将のもとにはなく、村の中や有力寺院にあった。おそらく近江では村々にも石垣積みを行う職人が多数いたと考えられている。

信長は安土城の土台を石垣で築くことを考えた時点で、近畿圏内のありとあらゆる地域から、石垣の技術を持った人々をすべて徴集したのである。

天正四年（一五七六）から天正七年（一五七九）というたった三年間でなしえた工事は、一つの村の職人でまかなえるものではない。

これらのことを証明するように、安土城の石垣をつぶさに見ていくと、一つとして特定の法則で同じように積まれた石垣がないことがわかる。石の大きさから積み方まで、様々な地域の積み手によって積まれていることがわかるであろう。

「穴太衆・穴太積」で安土城の石垣が築かれたといわれるのは、安土城のネームバリューが江戸時代になっても健在であったこと示しているのである。

（よみがえる日本の城から）

▲信長は敵国と政略によって、尾張から京につながる美濃、近江を手中にし、着々と天下取りを推し進めていった。

信長のキャッチフレーズ「天下布武」に込めた意味

信長が掲げた「天下布武」とは、一力すべて天下を統一する」という猛々しい意味に思われがちな言葉だが、ここでいう「武」とは「七徳の武」という平和的なニュアンスをもっている。もともと「武」という文字は、「戈（ほこ）を止める」からきており、争いをふせぐという意味だ。わかりやすくいえば天下布武は「暴力を使わず、徳をもって世の中を治めていこう」ということなのである。

この天下布武の願いを反映させたのが、信長が禅僧・沢彦宗恩（たくげんそうおん）に選ばせ、改名した地名「岐阜」である。1567（永禄10）年、斎藤家を滅ぼし手に入れた、美濃・稲葉山城下の井ノ口を改名するにあたり、中国古代史にその由来を求めた。「岐」は周の文王が岐山から天下を平定したことにちなみ、「阜」は学問の祖である孔子の生誕地である曲阜にちなんでいる。信長の斬しい本拠地となった岐阜という地名には、平和と学問の都という意味が込められていたのだ。

2）大手道羽柴秀吉邸で登城組と城下組にわかれる —— 大手門前

①大津で新幹線を降り貸し切り観光バスに乗車、およそ30分ほどで安土城大手門前駐車場に到着。トイレ、休憩所
安土城は全員で大手道を１歩入り、20mほど進んだ羽柴秀吉邸跡で登城組と城下組（大森会長案内）に分かれる。

＊安土城は標高 196m、比高 110m、結構急坂です。体力に自信のない方城下組にお回りください

②大手水濠跡＝駐車場あたりが大手水濠、城は北、東、西の３面を琵琶湖に囲み、正面に堀を巡らせ城を独立させた。

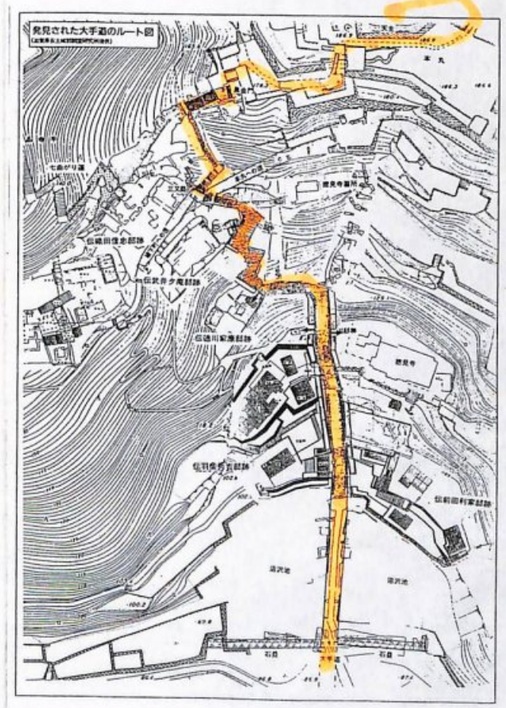
＊近年、埋め立てで琵琶湖が後退、現状は安土山に接していない

③石塁と大手３門＝正面、東西に伸びる全長 100mの石塁、当然白壁が巡った。権威を示すデモンストレーションか。大手門跡は真ん中の大手道との交点と推定されるが、発掘調査でも遺構は検出出来なかったという。石塁は中央（大手推定地）と東側平虎口、西側平虎口の３門と西側平虎口のさらに奥に升形虎口が存在した。

＊信長は天皇の行幸を想定し、京都の内裏に倣って３門としたと考えられている。
だとすれば中央は天皇、または王を自認した信長の専用道路ということになる

＊門形式は不明。中央は唐門、左右平門は薬医門など権威の門、升形は櫓門が考えられる

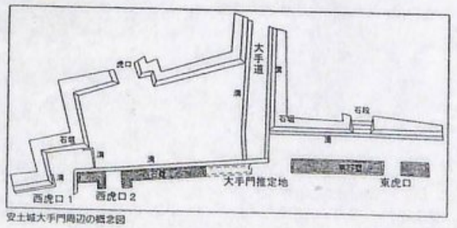
＊大手門入って左平地は空間、建物はなかった。兵の集結や行列を整える武者溜まりか、超巨大升形に見えなくもない



↓城跡全景　↑大手道

休憩所

→大手3門周辺



安土城大手門周辺の概念図

3）天に向かって１直線に伸びる ―― 大手道を登る

①大手道＝みずから王になろうとした信長の天主への道は直線およそ 180mの直線道路。天に向かってまっ直ぐに伸びた。

＊大手道の道幅はおよそ６ｍ、両側に石敷の溝 1.2m、合計 8.2m。その両側の屋敷との間に高さ３ｍの石垣があった。道幅や側溝などを観察。

＊発掘前は幅２、３ｍの曲折した参道であったが、地下に巨大な大手道を発見

②石段は１段ごとの幅が広く登りにくい。馬の足巾に合わせたともいう。

③石段の踏み石や縁石に石仏が多く利用されている。探しながらゆっくり登る。

＊信長の神仏を恐れぬ姿とされるが、中世の城作りではよくあること。単に石材としての数あわせ、合理的な信長がリサイクルしたとする説が主流。しかし他城では旧領主墓を利用した旧勢力の一掃、守護、畏怖効果説などもある。

④大手道は直線道路の上に横持ち道、７曲がり道をへて主郭部へ通ずる。

＊史跡看板＝目の前にまっすぐ延びている幅広い道が安土城の大手道です。安土城の正面玄関である大手門から山頂部に築かれた天主、本丸に至る城内では最も重要な道です。その構造から直線部分、横道・七曲がり状部分、主郭外周部分の３つの部分によって構成されています。（中略）道の東西には複数の郭をひな壇状に配した伝羽柴秀吉邸、伝前田利家邸などの屋敷があり、これらは書院造りの主殿を中心に厩や隅櫓など多くの建物で構成されています。まさに安土城の正面玄関を飾るにふさわしい堂々とした屋敷地といえるでしょう。

4）石垣に角櫓を上げ、優雅な御殿を構えた ―― 城造りの伝羽柴秀吉邸

①大手道の両側、石垣＋白壁塀の内側には有力大名が配置された。向かって左側は羽柴秀吉、右側は前田年家、徳川家康邸であった。

＊周辺に置かれたとみられる柴田勝家、丹羽長秀、明智光秀邸は不明

②秀吉邸の虎口は２か所、上が高麗門で正門、下は２階建ての櫓門で通用門。全員で櫓門跡をくぐる。升形のようにもみえる。

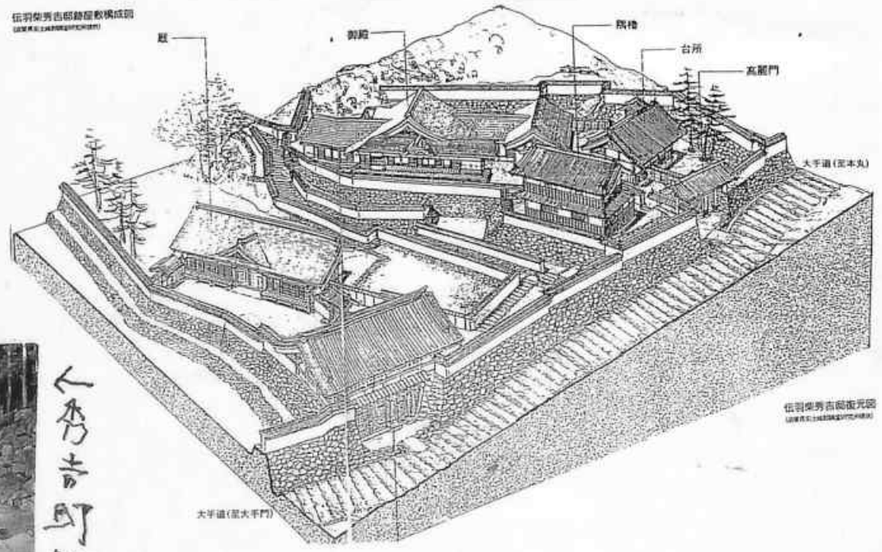
③内部は石垣で小分け、大きく２段、詳しくは６段から成る。

＊発掘前は草木しげる一面の荒れ地であったが、現在は発掘、復元整備されている。

④下段は厩跡。復元された石垣群を見上げる。

⑤秀吉の住む御殿は最上段にある。客人は玄関、式台、遠侍をへて主殿へ招かれた。礎石が点在し華麗な書院建築跡を物語る。長浜城を本拠にした秀吉は安土城での信長対面時

豊臣秀吉



秀吉町跡

にこの地に起居し、やがて後継者として「天下人」へと雄飛する。

＊焼失した形跡が無いことから落城時も焼失は免れ、のち解体移転されたとみられる

⑥ここで途城組、城下組に分かれる。

⑦総見寺＝織田家菩提寺として城内百々橋口側に創建、跡地周辺に仁王門（重要文化財）、三重塔などが現存している。本堂は安政元年に焼失、大手道脇の伝徳川家康邸跡に移転、現在は臨済宗妙心寺派に所属している。

5）高石垣がはじめて登場 ―― 黒金（くろがね）門からは主郭（狭義の安土城）

①大手道を登り切った先、やや進んで黒金門と総石垣の主郭石垣に出る。接続が悪いがここからが主郭、狭義の安土城になる。

②黒金門周辺石垣は最大規模の石材を使用。高石垣時代の幕明け。

③「土の城」から「石の城」へ。安土城は近世城郭の嚆矢とする。

石垣１、２ｍ→５ｍ超す高石垣登場

人頭大の自然石→あら割り石。やや大きい、角張り、長辺が１ｍをこすものも

野ヅラ積み→打ち込みハギ（わり石積み）。あら割り石を組み、間石、ぐり石を入れる

コーナー部＝大きい角石を積み上げる。未完成だが算木組の思想がある。

④黒金（くろがね）門＝主郭大手虎口にあたる。上り坂、外升形門。最大規模の守り。門形式などは不詳。門の金具が黒うるしに金張りだったことに由来するという。

＊史跡解説＝ここには安土城中枢部への主要な入り口である黒金門の跡です。周囲の石垣や高層の石垣とくらべると使われている石の大きさに驚かされることでしょう。平成５年度の発掘調査では黒金門も天主とともに火災にあっていることがわかりました。多量の焼けた瓦の中には菊紋、桐紋などの金箔瓦も含まれていました。壮大な往時の姿を偲ばせる黒金紋より先は信長が選ばれた側近たちと日常生活を送っていた安土城のまさに中枢部となります。高く聳える天主を中心に本丸、２の丸、３の丸などの主要な郭で構成されるこの一帯は標高が 180mを越え、安土山ではもっとも高い所にあります。東西 180 m、南北 100mにおよぶその周囲は高く頑丈な石垣で固められ、周囲からは屹立しています（以下省略）

⑤２の丸帯び曲輪＝黒金門をこえると２の丸、石垣に囲まれた帯曲輪を回る。本丸台地の入り口の高石垣は角櫓、左折すると西の丸で信長の墓、右折は本丸に出る。

＊黒金門と門から本丸までの帯曲輪は高石垣が連続する。石積みに注目しながら進む

⑥信長公御廟＝後継した豊臣秀吉が天正11年に信長の葬儀を主催、同時に天守下、２の丸（西の丸）に信長ゆかりの太刀、烏帽子、ひただれなどを埋葬して御廟とした。

◎安土城跡黒金門周辺図（『特別史跡安土城跡修理工事報告書』(1)滋賀県教育委員会1985）

→２の丸帯曲輪

信長廟

→黒金門跡

6）天皇行幸のために作られた本丸御殿 —— 本丸跡

①本丸御殿跡＝平成の発掘調査ですべての礎石を検出、本丸敷地いっぱいに東西２棟とそれらを結ぶ廊下状の建物があった。

②当初、本丸は信長の居所と考えられたが、発掘結果などから「信長公記」にある「行幸の御殿」との見方が有力になっている。

＊行幸を仰ぐという行為には武家の棟梁としての正当性を権威づける目的があった

＊史跡看板＝天主台を眼前に仰ぐこの場所は千畳敷きと呼ばれた安土城本丸御殿跡と伝えられてきました。東西50m、南北34ｍｋ東西に細長い敷地は３方を天主台、本丸、帯曲輪、３の丸の各石垣で囲まれ、南方に向かってのみ展望が開けています。（中略）「信長公記」には「一天の君、万乗の主」の御座御殿である「行幸の間」と呼ばれる建物があり、内に「皇后の間」が設けられていたことを記しています。信長の２度にわたる安土城の天皇行幸計画は実現しませんでしたが、この本丸建物こそ天皇行幸のために信長が用意した行幸御殿だったのではないでしょうか。

7）天を突く黄金の巨大天主 —— 専制君主信長の生活空間

①天主跡＝日本建築史上初の五重、高層天主。戦う城から見せる城へ、権威の象徴として築かれた巨大天主は、戦国の世の終焉を告げる巨大モニメントでもあった。高さ12mの天主台上に高さ 1.5mの石垣を築き、その上に３重入母屋と２重望楼を上げた。５重７階、高さおよそ37mであった。

＊参考＝のちの豊臣大坂城天守総高　m、徳川江戸城天守総高　m

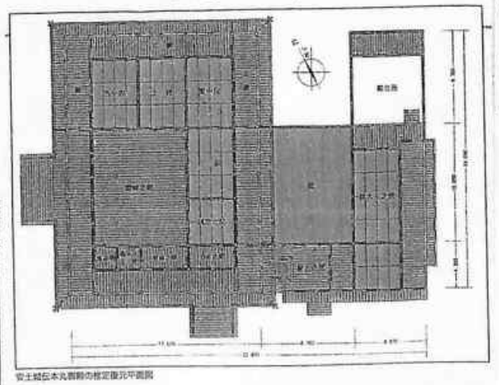
②入母屋３重は信長の生活空間。外観は黒漆塗装の板壁、一部白漆喰土壁、屋根は瓦葺き、軒瓦金箔押し、飾り金具破風付き。

③圧巻は望楼部分、４重（５階）は８角形で天界をイメージした黄金の間、４重（６階）は望楼の間で金箔を施した内装、外壁、大屋根には金箔シャチが乗った。

＊次の見学地「信長の館」で望楼部分を実感する。

④信長は天主望楼から琵琶湖を望み、京都の空を仰ぎながら天下の情勢を窺った。「天下布武」「天下一統」まであと一歩。天正10年５月29日運命の出陣、信長は生きて再びこの

天守跡



地を踏むことはなかった。

＊史跡看板＝安土城の天主は完成してわずか３年後の天正10年６月に焼失してしまいます。その後は訪れる人もなく永い年月の間にガレキと草木の下に埋もれてしきいました。ここにはじめて調査の手が入ったのは昭和15年のことです。厚い堆積土を除くと往時そのままの礎石がみごとに現れました。（中略）安土城は記録から地上６階、地下１階の当時としては傑出した高層の大建築であったことがわかります。（中略＝現在地は）地階部分ですが、天主台の大きさはこれよりはるかに大きく大きく２倍半近くあります。現在では石垣上部の崩壊が激しくその規模を目でたしかめることはできません。

②時間あれば＝からめて八角平に通じる升形虎口周辺を回る

7）下りは同じコースを降りる —— けがのないようゆっくりと

①前回の安土城は下りは百々道口を迂回したが、今回は以降の行程も考慮して同じ道を降りる。ただしどうしても百々道口を廻りたいという方は現地で申し出てください。

＊大手道より急勾配下り坂ですが、複数の希望者がご一緒され、かつ道草なし、バス時間厳守を条件に許可します

②バスの出発時間は１２時５０分です。

8）蘇った幻の名城、安土城天主「信長の館」 —— 望楼部分を復元展示

①バス乗車５分ほどで「信長の館」に到着。見学時間は３０分（予定）です。

②安土城天主の望楼部分を原寸大で復元、外装には金箔10万枚を使用した外壁、金のシャチを頂く大屋根、内部は狩野永徳に描かせた「金碧障壁画」などが再現されている。豪華絢爛、　　見る者を圧倒する。

③盛時の安土城はこの下に大入母屋造り３重と地下１階があり、総高は　mと推定されている。

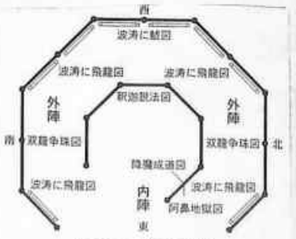
＊1992年「スペイン・セベリア万博」の日本館メイン展示とされたものを解体移築した

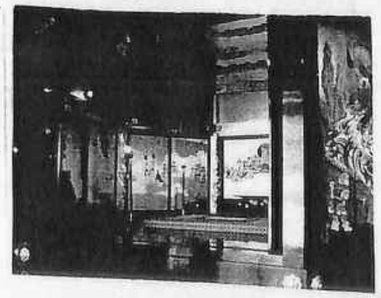
＊城下組はセミナリヨ跡などを見学する（別資料参照）

館内

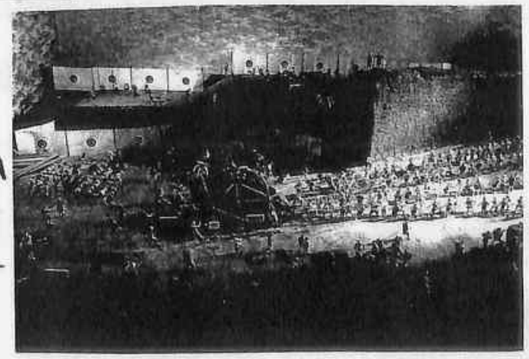
復元天主

信長の館





→築城模型



「城を歩く会」１０月定例会資料　　平成２２－１０－２０

9－10

現存最古「古式望楼型天守」の丸岡城を歩く

本多４万石、有馬５万石居城　ご案内時間７５分（バス出発時間９時４５分＝予定）

丸岡城（福井県坂井市）

雪国の天気は変わりやすい。吹雪と晴れ間が一日に何回となく繰り返される。福井県坂井市の丸岡城を訪ねたときも、緩やかな坂道を登る間に、横殴りの雪が消え、古武士のようないかめしい風貌の城郭が柔らかな日差しの中に現れた。

○　○　○

天正４（１５７６）年、柴田勝家のおい、勝豊によって築城された。天守閣は回廊を巡らした望楼式で、日本城郭史上最古といわれ、国の重要文化財に指定されている。３階建てだが、３階まで貫く通し柱がなく、堅牢に造った一階に２、３階部分を乗せただけ。屋根が石葺きなのも珍しい。

城内に入る。板敷き、20畳ほどの広さか。銃眼や物見窓からの明かりが薄い室内を照らす。左右の２カ所に「石落とし」があった。薄い板囲いの側壁の外に畳１畳分の出っ張りがあり、この部分に石を乗せ、底板をはずして、石垣を登ってくる敵を襲う仕掛けだ。

２階へ急な階段を上る。結び目のついたロープが頼り。お年寄りや子供への配慮よりは、当時のままの姿を優先させた？　「城内でのご事故は一切責任を負いません」の張り紙が妙に緊迫感を感じさせる。

【メモ】ＪＲ北陸本線福井駅から京福バスで40分、「丸岡城」下車。北陸自動車道丸岡ＩＣから約２キロ。入場料300円。無休。日本百名城、さくら名所百選に選ばれている。問い合わせは坂井市観光課☎0776・50・3152。

うっすらと雪化粧した丸岡城。サクラの満開時には霞の中に城が浮かんでいるように見えることから「霞ケ城」とも呼ばれている　＝4日、福井県坂井市

最古の天守閣、当時のまま再現

３階にもロープの手助けで登る。欅千が周囲に巡らされていて、福井平野を一望できる。東に白山、南に九頭竜川…。欅千に装飾はなく、遠くを見るためだけの実用重視の構造だ。

案内書によると、犬山城（愛知県犬山市）や高知城（高知市）と同様に、初期の天守の特徴を備えているという。

明治維新までの歴代城主17人の中で有名なのは、６代目本多成重だろう。幼名「仙千代」。徳川家康の功臣、本多重次（勇名、鬼作左）が陣中から妻にあてた手紙「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」に登場する「お仙」が、後の成重だ。

明治４年の廃藩置県で廃城となったが、天守は解体を免れた。しかし、昭和23年の福井地震で倒壊。死者3千700人余、全壊約3万6千戸。その震源地がここ旧丸岡町（現在の坂井市）だった。

○　○　○

余談だが、作家、司馬遼太郎は福井地震のとき、産経新聞社京都支局の記者。京都府庁の救援トラックに乗って現場に一番乗りした。「小学生の女の子が、死んだ赤ん坊を清川でまる洗いに洗っているのを見て、息を忘れる思いがした…記事には書けなかった」（「街道をゆく　越前の諸道」より）。

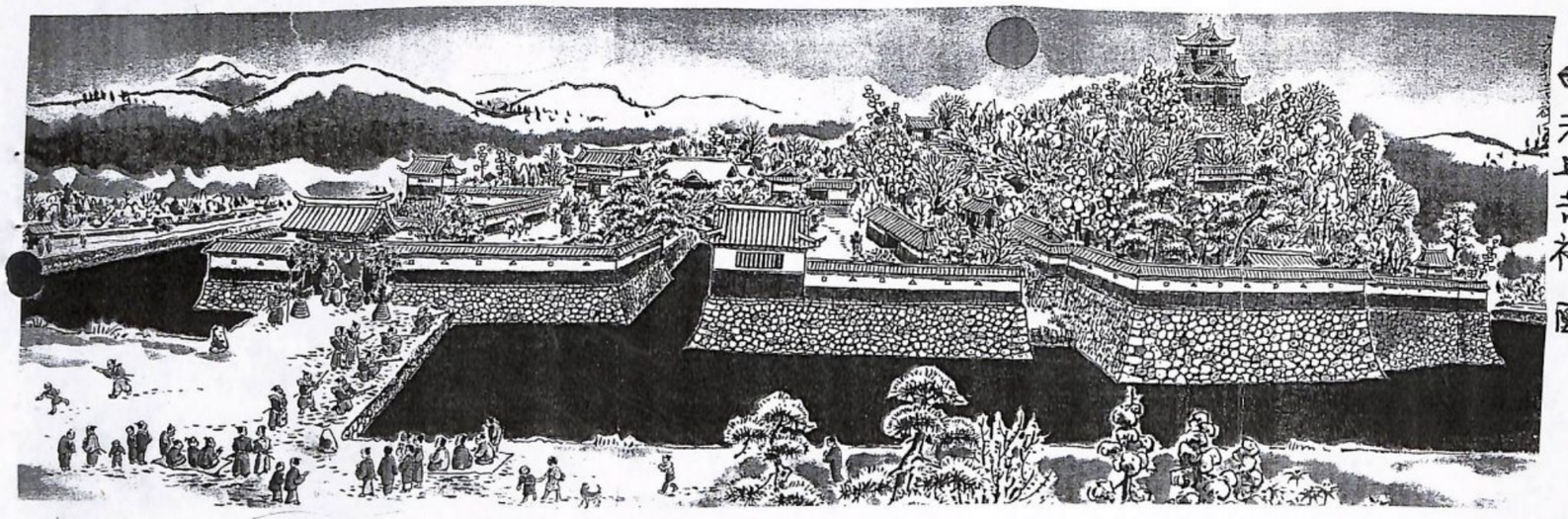
昭和30年に修復。年間30万人余の入場者を数えるが、この日は雪のせいか見学中に出会ったのは３人。その一人、横浜市から来たという裏哲郎さん(63)は「小田原城に似たお城。（天守が）よく今日まで残っていてくれたと感謝したくなります」と話していた。

（平尾隆天、写真も）

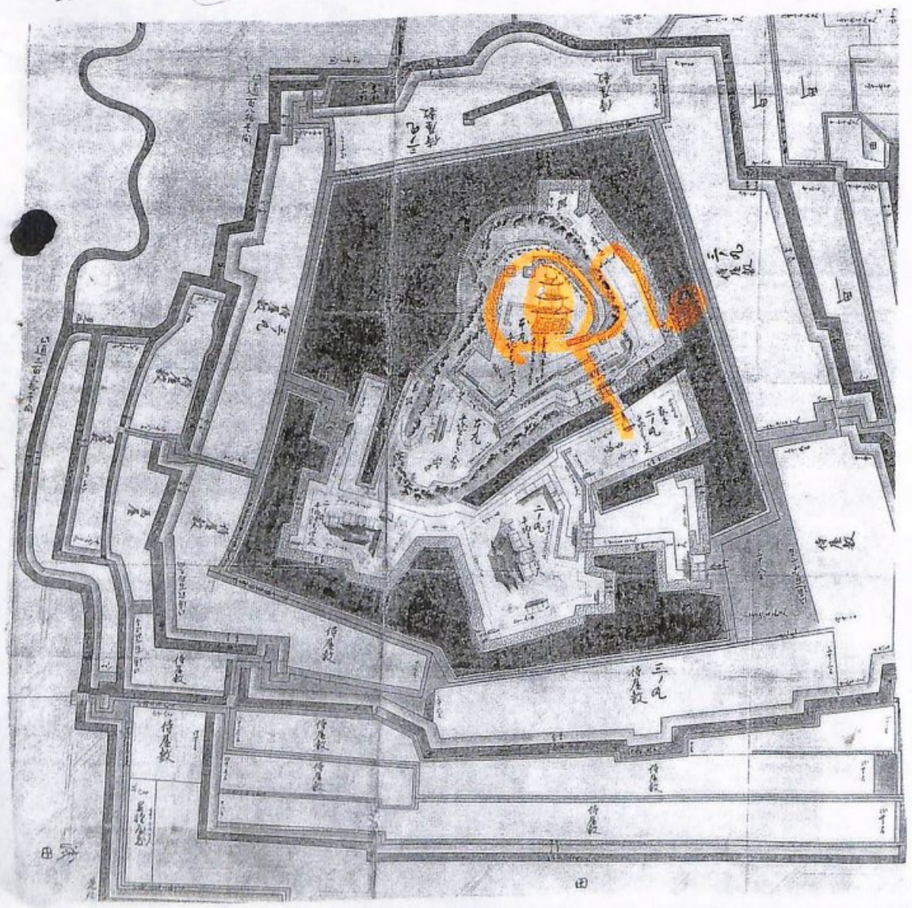
丸岡城主系図

- 青山宗勝 ― 忠元 …… 除封（結城秀康組、今村嘉次在番）
- 本多 重正 ― 重次 ― 新封 ― 成重 ― 重能 ― 重昭 ― 重芳 ― 除封 ― 清純 ― 富正 ― 富武
- 有馬 晴信 ― 直純 ― 康純 ― 越後糸魚川より ― 清純
- 清純 ― 道純 ― 廃藩置県
- 道純 ― 温純 ― 徳純（側室政教の三男）
- 徳純 ― 義純 ― 允純 ― 李純 ― 一準
- 允純 ― 純佑
- 李純 ― 忠可
- 李純 ― 純義

注……は城主家の交代
――は養子相続
太字は城主



←元丸岡城図



←日経2月12日紙面

主要年表　最古

天正４年1576	柴田勝家支城としてオイ柴田勝豊築城
〃　11年1583	柴田氏滅亡、豊臣系の青山宗勝入城
慶長６年1601	越前家支城になる。本多成重ら在城
寛永元年1624	越前家改易、本多氏諸侯に列す
元禄８年1695	本多家改易、有馬清純移封
慶応４年1868	有馬家８代道純の時明治維新
明治４年	廃藩置県、丸岡県庁、福井県合併
〃　６年	廃城、払い下げ、御殿は撤去されたが天守は個人所有として残る
〃　34年	天守を丸岡町に寄付、公会堂になる
大正→昭和はじめ	堀を埋め立て水田になる
昭和９年	天守を旧国宝保存法で国宝指定
〃　23年	福井大地震で天守倒壊
〃　25年	新文化財保護法で重要文化財に格下げ
〃　30年	修理再建
〃　52年	霞が城公園として整備

1）おせん泣かすな馬こやせ ―― 主要城主の横顔

①築城者・柴田勝豊（？－1583）＝柴田勝家のオイで養子。豊原城をへて丸岡城を築城して移る。天正10年「本能寺の変」後の清洲会議で羽柴秀吉、丹羽長秀が結束して嫡孫三法師を推した時、勝家は秀吉の長浜城を要求、勝豊が入城した。しかし勝家と距離をおく勝豊は家康とも近く「賤が岳の戦い」で前線基地が機能することはなかった。

②本多成重の父・鬼の作左（1529－1596）＝作左衛門重次。家康三河時代３奉行の１人、勇猛果敢な武将で行政面でも力を発揮した。鬼のように厳格、家康にさえも厳しく指摘したとされる。秀吉と家康が対決した「小牧・長久手の戦い」で、秀吉の生母仲を人質として預かった時、建物の回りに薪を積み上げ、もし家康の身に変事があればただちに焼き殺す姿勢を示した。後にこれを知った秀吉は重次の放逐を命令、家康は江戸入府にあたり上総国古市場（君津市）に蟄居させた。丸岡城の天守脇に「一筆啓上碑」がある。

＊丸岡本多家は成重が４万石で入封したが、４代重益が藩政を省みず自ら酒色におぼれたことでお家騒動となり「家人治めるさまよからず」て改易となる。

③最後の城主・有馬道純（1831－1903）＝有馬家は肥前の出、晴信が秀吉に仕え４万石、直純は関が原の戦いで家康に付いて日向延岡５万石に加増された。のち糸魚川をへた元禄８年清純の時丸岡５万石に転封、子孫が明治維新に及んだ。最後の藩主８代道純は幕末混乱期若年寄、外国掛、老中を歴任、１次、２次長州征伐に出陣し、領内に海防台場を構築している。維新後の余生は穏やか、明治17年子爵、26年従三位に列し、36年67才の生涯を遂げた。

2）戦国期山城にみまがう平山城 —— 霞ケ城公園に到着

①2日目。ホテルからバス20分ほどで霞ケ城公園駐車場に到着。
一見、戦国期の山城にもみえる。
＊駐車場＝本丸天守直下の内堀跡。
目の前の山は本丸、復元？石垣が続くが改変がはげしい
道路から先＝3の丸侍屋敷街、その先に河川を利用した外堀を回している
一筆啓上茶屋（売店、トイレ）＝見学後利用してください
歴史民俗資料館と霞が城公園（2の丸御殿跡）＝後ほど自由見学
②案内看板＝方位や城の概要、現在地、登城ルートを把握
縄張り＝平山城、変形輪郭式（内堀を埋め立てたので現状は中世の山城にみえる）
③登城開始
登城道は後補、観光用。2の丸から続く大手道は帰り道で利用する。
③本丸水の手郭＝本丸下の腰郭
内堀と3の丸御下屋敷、武家屋敷街を一望。立地を体感する。

生活を守る（近世に） 土の城 → 石の城
古活

3）望楼部分が大きく重量感がある —— 古式な天守外観を見上げる

①券売所（ここから有料＝団体入城）
②目前に天守が迫る。すぐ立ち入らずまずは離れて外観から。
高さは石垣6から7m、シャチを除く天守12.5m、総高およそ20m

案内看板 図

丸岡城碑

石製鯱（しゃちほこ） 城の瓦は鬼瓦を含めすべて石造りだった。天守入口階段脇に残る石製鯱は福井地震で倒壊した天守のもので、昭和15～17年の製作。本来の鯱は木製銅板張りで、現在は木製に戻されている。

一筆啓上茶屋

観光用登城路

← 本丸水の手郭 から内堀を望む

徳川家康譜代第一の功臣で鬼作左の勇名をとどろかせた本多作左衛門重次が陣中から妻にあて「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥せ」と書き送った話は有名である。文中のお仙とは嫡子仙千代で、後の福井城主結城秀康に仕え、数度の戦いに武勲を立て丸岡城6代目の城主となった本多成重のことである。この書簡碑は天守閣石垣の東北端に建てられている。

③現存最古、天正4年柴田勝豊建造とする。形式を「古式望楼型」という。
④「望楼」は高所から展望する建物、物見やぐらをいう。
望楼型天守＝入母屋造り母屋に望楼を載せること
対する塔層型＝五重の塔型、下から上へ一定の比率で狭める。
＊はじめは望楼型で、慶長後期は塔層型が主流になる。
望楼は黒主流、重く経費かさむ、自活を意識。
塔層型は白主流、より高くより華麗に（みせる）、権威の象徴
＊望楼は天守台の形状に沿って内側に掘っ立て柱を、塔層は正四角形の天守台テンバいっぱいに土台を回して天守を建てる。天守台石積み技術の向上で塔層が可能になった
＊丸岡城天守も現況は礎石造りだが、当初は掘っ立て柱であった
⑤他天守とくらべ1重部分が小さい。しかし2重望楼部分は大きく、重量感がある。
⑥単層、母屋部分。壁面は白と黒。石落とし、出格子窓は突き上げ窓＋武者窓、狭間。
＊上半分は白。柱を隠す大壁で土壁を白しっくい仕上げ。（白を強調する）
下半分は下見板張りの黒。中は土壁だが、白壁は雨水に弱いので表面を板張りにした。
塗装は柿シブカ。（松本城などうるし黒塗り高級仕上げの城もある）
＊石落とし、窓構造、狭間は城造りの常套手段
⑦石垣との間を埋める板ひさし（腰屋根）は雨水の進入を防ぐ。
＊石垣は水に弱い。土中に雨道の空洞ができると石垣は倒壊する
⑧1重と2重の間に入母屋破風とかざり破風。2階の明かり取り兼射場。
⑨望楼床に注目。出しケタ造り。屋根と望楼の重量を支える。強度、バランスに優れる。
＊城では大変珍しい。1階にくらべ望楼部が大きいのも出しケタ造りによるカ
⑩望楼の壁は柱がみえる真壁。回り縁（装飾＝後出）。突き上げ窓は後世（近年）の仮設。
⑪屋根は石瓦（後出）本瓦葺き。石シャチ。

古式望楼型天守

荒々しい野ツラ張サ

明治の古写真

震災倒壊した天守

← 板ひさし

突き上げ窓

4）荒々しい野ヅラ積み —— 天守台石垣を観察

①アラ割り石を積み上げた野ヅラ積み、荒々しく野性的、力強さがある。一見粗雑な印象だが強度はある。

②石積みは不揃いの石をバランス良く積み上げ、横目地は通らない。
石の隙間に小さな間石を詰め、石垣裏にはグリ石を入れて排水にも考慮している。

＊初期の野ヅラ積みは自然石を積み上げた。丸岡城の石垣は自然石を割ったアラ割り石を使用、高さがある、角があるなど、野ヅラ積みから打ち込みハギへの移行期で、本来は「アラ割り積み」として区別すべきだといえる。

③天守台高さはおよそ６、７ｍ、土中に根石部分１、２ｍが埋まっている。

④天守台は昭和23年の福井大地震で天守とともに崩壊、積み直しが行われたのでどの程度正確に再現されたかどうかはわからない。

5）急階段はロープに捕まって —— 内部も注意が必要

①天守に登る。入り口と内部の急階段は危険です。十分ご注意ください。

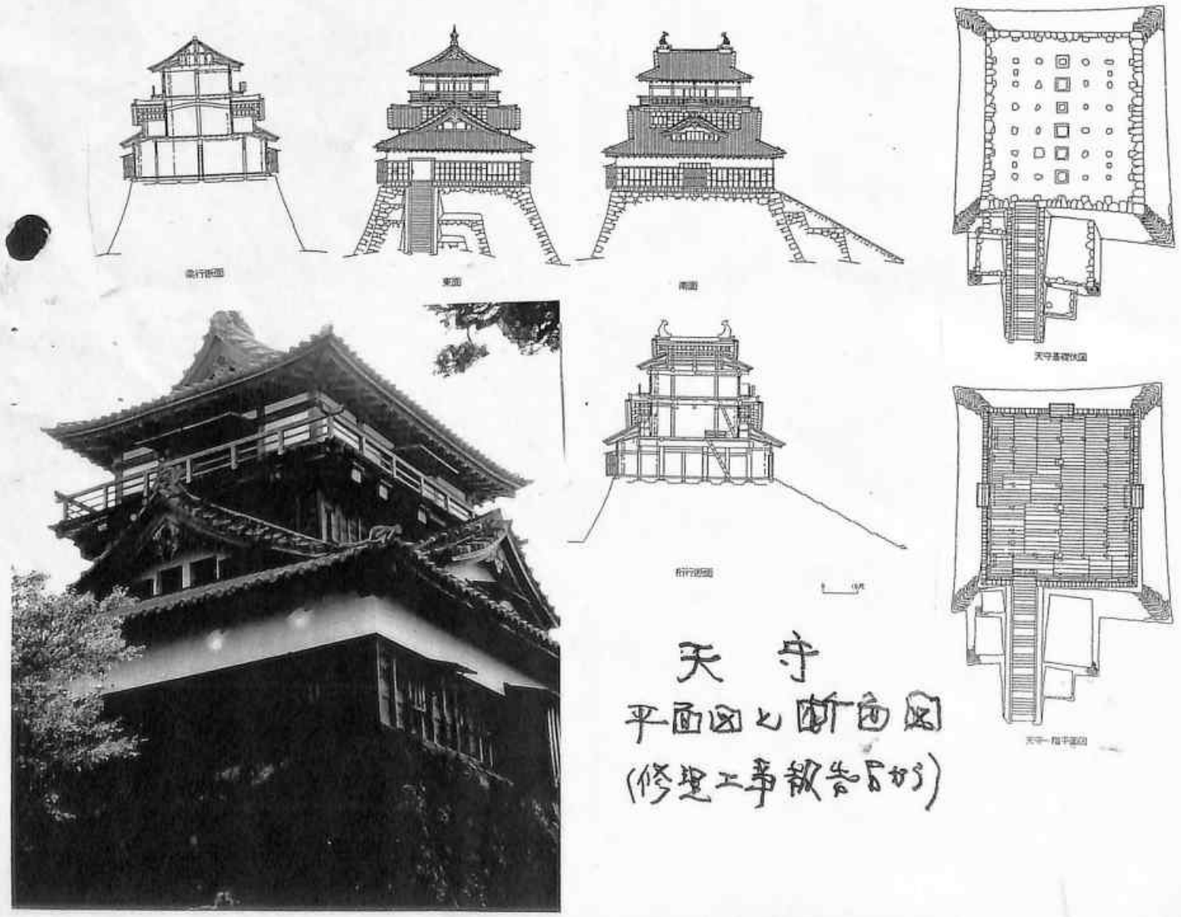
②付け櫓跡＝昔は複合式だった。現在の石段は直線だが当時は右側からいったん付け櫓の入り口を経由して天守に入った。

③腰屋根。天守に多い穴蔵がなく、いきなり１階へ。

④１階（単層部分）＝内部は仕切りなし板張りの空間。身舎（もや）と入り側を分ける敷居はなく当初から畳敷きは想定されていない。

＊内装は壁面板張り、天井はなく柱や梁が剝き出し。チョウナやヤリガンナ仕上げに注目。武者窓（出格子窓）、石落とし、箱狭間

⑤階段＝垂直に近い急勾配のためロープを使用。城は戦うためで観光用に作られていない。注意して登る。自信のない方はご遠慮ください。



⑥２階（中間破風部分）＝屋根裏階のため四方の破風内に明かり窓を作って採光している

⑦３階（望楼部分）＝回り縁は飾り＝床部分より高く実用的でない。慶長後期の層塔型天守と同じ作りであり、慶長建造説の根拠になっている。

⑧石瓦＝笏谷（しゃくたに）石製、平瓦15、軒平瓦27、鬼瓦37kg、約６千枚使用、総重量は 100ｔにも達した。積雪地であり寒暖の差による破損を防いだ。

6）雲の井やお静伝説 —— 記念碑もみのがせない

①鬼の作左から妻へ、一筆啓上書簡碑＝日本一短い手紙。簡潔な手紙文として有名。
一筆啓上、火の用心、お仙（嫡男成重）泣かすな、馬肥やせ

②天守の石のシャチ＝解体修理で外した。江戸後期または近代カ

③霞ケ城の由来となった「雲の井」＝本丸の井戸。一向一揆の残党が攻めた時、井戸から大蛇が現れ「かすみ」を吐いて城を危機から救ったという。

③伝説「人柱お静」の慰霊碑＝築城の時、どうしても天守閣の石垣が崩れてしまうため、人柱を募ったところお静が息子を取り立てる約束で応じた。しかし成人前に柴田家が滅亡してホゴに。毎年春雨のころ、堀水が溢れて城下の人たちを困らせた。「お静の血の涙雨」といい、祠を建てて霊を慰めたという。

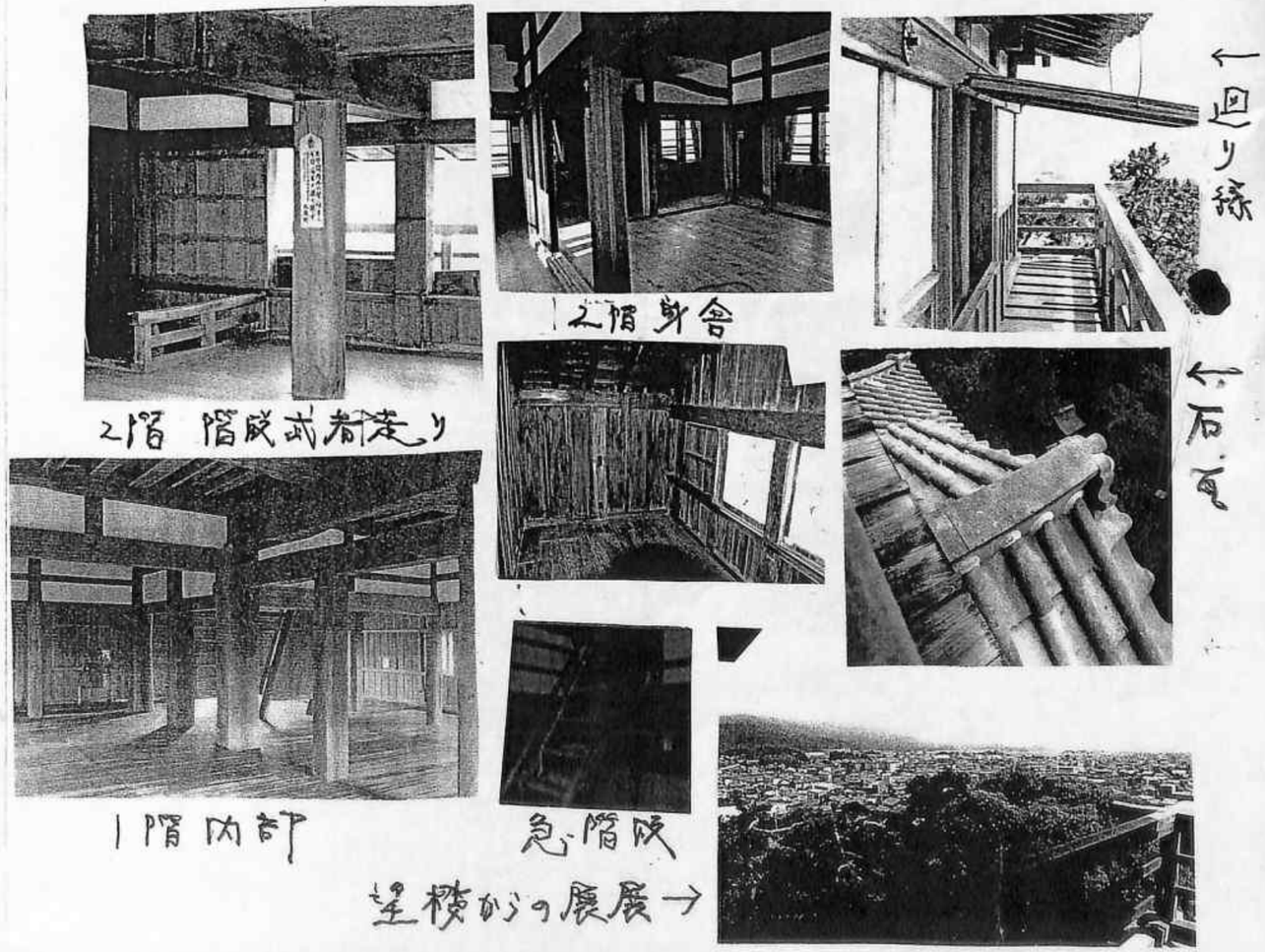
7）郷土博物館は自由見学とします —— 出発時間厳守

①本丸跡＝本丸御殿、門３棟、櫓２棟があった。

②歴史民族博物館＝郷土資料館（自由見学）

③霞ケ城公園＝２の丸御殿跡　（　〃　）

④一筆啓上茶屋＝茶店、みやげ（　〃　）



「城を歩く会」１０月定例会資料　　平成２２－１０－２０

徳川家最強軍団「赤備え」の井伊家３５万石「彦根城」を歩く

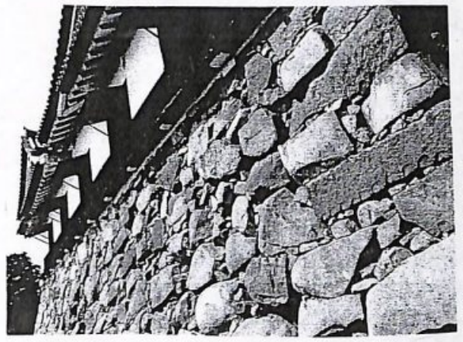
ご案内時間１１０分（バス出発時間１５時３０分＝予定）

彦根城・玄宮園観覧券　No 057543

15-16

歴代城主

彦根城	
井伊直政	直孝
直継	直澄
直興	直惟
直通	直恒
直定	直幸
直亮	直中
直弼	直憲
直憲	直弼
	直亮
	直定
	直興
	直通
	直中
	直憲



近隣の名城を集めた天下普請の城

赤色を旗印に戦場を疾駆し、「赤鬼」と恐れられた徳川家の最強軍団・井伊家の城。藩祖直政は慶長５年「関が原の合戦」で、先陣の福島正則隊を突破して「徳川が先陣」を強烈アピールした。戦後、高崎12万石から石田三成の居城であった佐和山近江18万石に栄進、嫡男直継と弟の直孝が彦根城を築いた。歴代藩主は譜代最大の名門として徳川幕府を支え、大老４人を送り込んだ。幕末大老に進んだ直弼は、幕府体制を強化して開国するという方針を打ち出すが、尊皇と攘夷を主張する人々の反発をかって桜田門外に倒れた。

＊

琵琶湖を眼下に収める要衝の地・彦根山に立地、湖上を掌握し、大坂城の豊臣勢力を封じこめる「要」として築かれた彦根城は、丘、麓、平地の３ブロックからなる平山城で屈指の堅城とされる。緩やかな丘陵一帯に天守をはじめとした櫓や門、石垣などの遺構がそっくり現存、その威容を現在に伝えている。

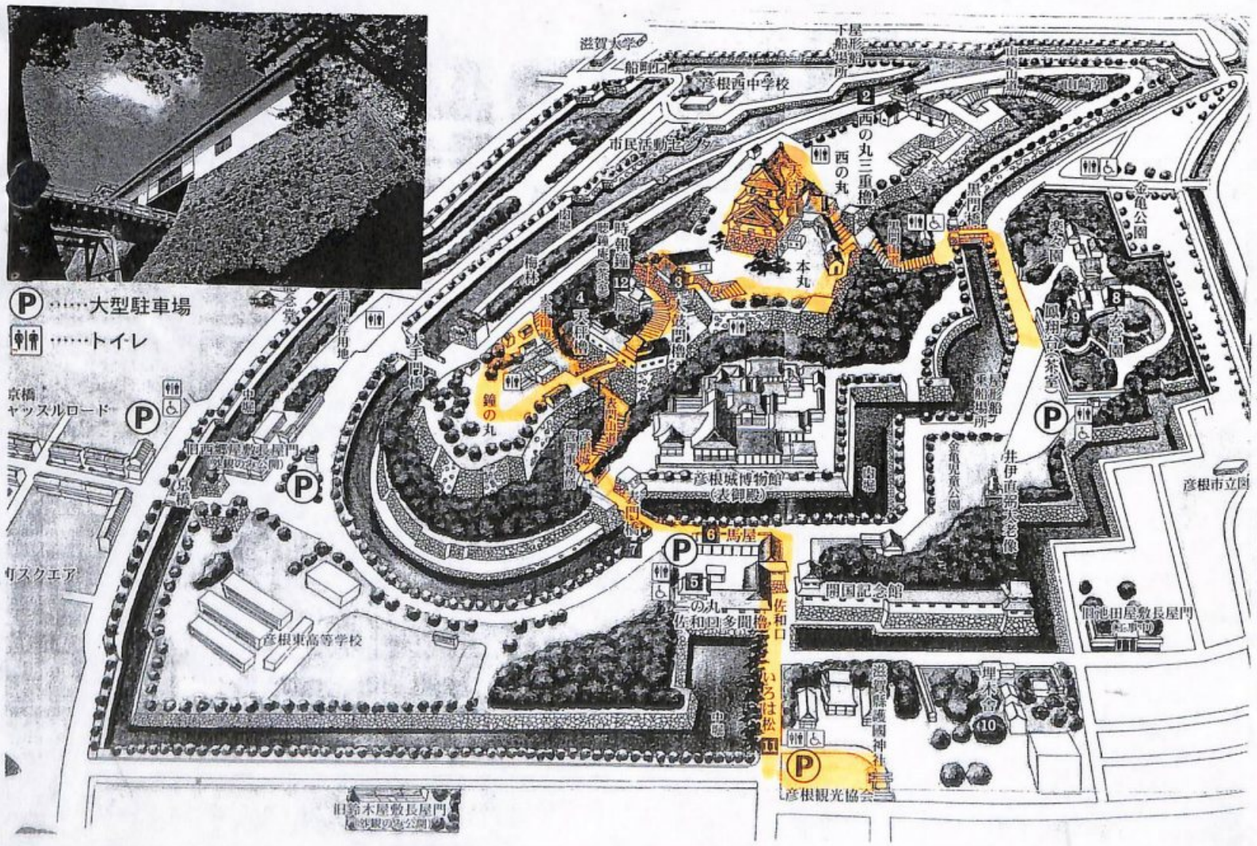
国宝天守の特徴は、初期望楼型で古式を色濃く止めていることと優れた建築装飾につきるだろう。昭和32年から行われた解体修理の結果、もと４重５階天守を移築縮小、転用古材に新材を補足して建物の外観を整えられたことが判明、古伝の大津城移築説がほぼ裏付けられた。

＊

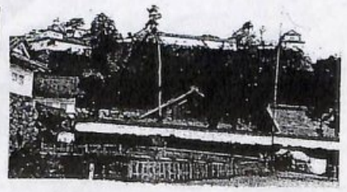
外観４面に破風を飾り付け、最上階の屋根に金色のシャチが輝く、２、３重の華頭窓や唐破風は慶長以前の古い手法だが実にバランスよく配置されている。姫路城、松本城、犬山城とともに国宝４城の１つであり、その華麗さは城歩きファンには見逃せない。

本会では平成15年に次ぐ２度目、今回は時間の都合で表御殿を復元した「彦根城博物館」などは省略した。佐和口、表門橋、天秤櫓、太鼓門櫓、天守、西の丸三重櫓をへて玄宮園などを回る。

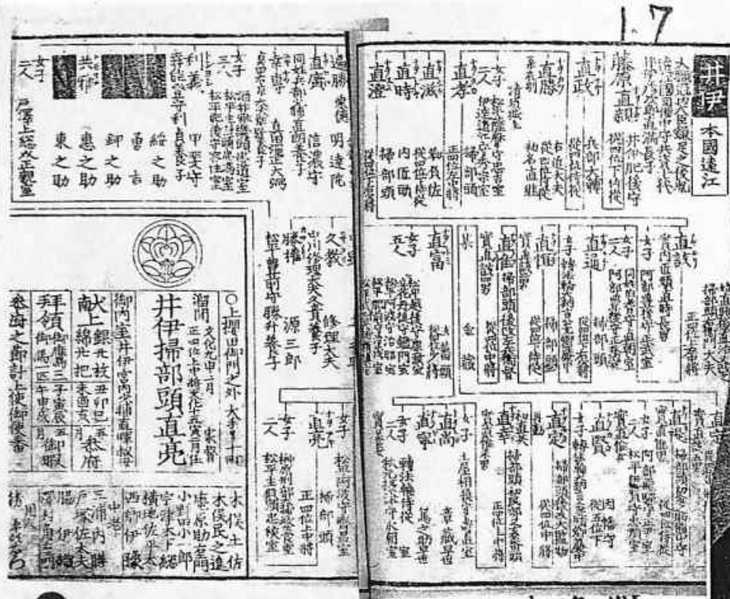
「徳川四天王」井伊直政から「大老」井伊直弼へ —— 徳川家 を支えた井伊家の居城



大手門古写真（明治９年撮影）



城名	彦根城、別名＝金亀（こんき）城
形式、縄張り	平山城、連郭式＋梯郭式縄張り
築城	慶長12年、天下普請、井伊直継、直孝
国宝	天守＝複合式、古式望楼型天守 ３重３階、地下階段室、玄関付き、本瓦葺き 付櫓、多聞櫓
文化財指定	重要文化財５件、国指定特別史跡、名勝


井伊
本國遠江
藤原直政
井伊掃部頭直亮
井伊直弼
直澄
直時
直孝
直滋
直勝
直政
直富
直定
直尚
直亮
直幸
直弼
直憲
直中
直元
直豊
直温
直倫
直亨
直愛
直充
直中

2）出所不明の続き櫓付き本丸大手門 —— 太鼓門（重要文化財）

①再び坂道、時報鐘と茶室を横目にした正面は本丸石垣、本丸山上を一周している。
本丸表門の太鼓門に出る。かつて２階に時や登城を告げる太鼓が置かれたことによる。

＊太鼓門前の石垣に岩盤を削った石塁がある。この先本丸にも岩盤が露呈している

②太鼓門は築城時の移築門、これまで彦根寺の山門とされたが、昭和31年からの解体修理の結果、出所（元城）不明だが城の移築門であることが判明した。

③１階は大御門で通路、２階は射場、緊急時は続櫓から櫓門に入った。
柱、梁、古いチョウナ、ヤリがんな仕上げは見逃せない。

＊解体修理の結果、文政９年の移築にあたり門規模が縮小、潜り戸などが移動したことが判明している

＊解説シート＝本丸にそびえる天主を目の前にした最後の門が重要文化財の太鼓門櫓です。門櫓の南には「く」の字に曲がった続櫓が敷設されています。（中略）

3）城立地を体感 —— 本丸御広間跡と着見櫓跡

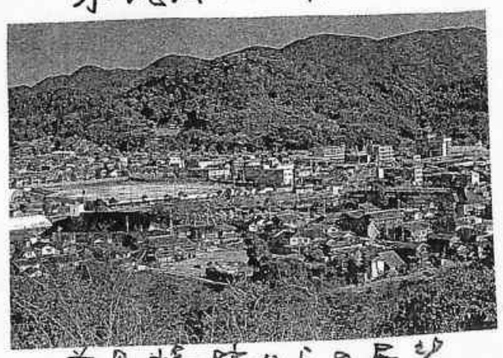
①本丸太鼓門と天守の間の広場が御広間（本丸御殿）跡で、礎石が遺構を伝えている。

②天守とほぼ同じ慶長９年ころ竣工。城主直継は鐘の丸の仮御殿から移って居館とした。
台所や長局も付設、家臣が詰め、藩主家族も生活したが手狭、山は不便などから、江戸後期、山麓現在博物館の地に「表御殿」を新築して本丸機能を移した。

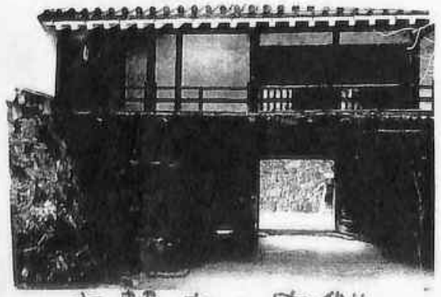
③展望台は本丸石垣、着見（つきみ＝着到）２重櫓台。佐和口と京橋口、市街を一望する。

太鼓門

本丸広間跡



着見櫓跡からの展望



太鼓門の内側

表御殿（博物館）

西の丸３重櫓

4）古式望楼と破風展覧会 —— 華麗な天守外観

①姫路城、松本城、犬山城とならぶ国宝４天守の１つ。

②小さいが華麗。35万石なら５重天守が相当だが、築城当時18万石だったため。

③西天守平側（正面）と南妻側（側面）の角がもっとも美しい。外観を遠望。
正面が広く側面が狭い長方形。棟高およそ15m、石垣を加えた総高はおよそ20m。

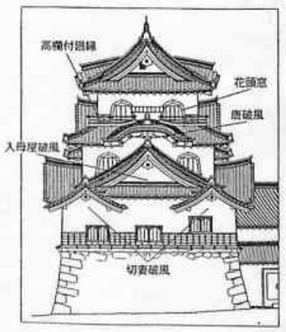
④望楼型の確認＝１重入母屋に望楼を載せる。通し柱はない。
１重＝大入母屋作りの母屋部分
２重＝破風部分
３重＝望楼部分

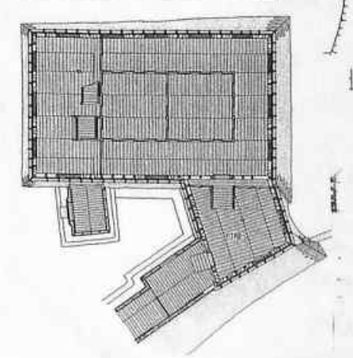
⑤白と黒のバランス
壁面は大壁の白壁で白い城を強調。下見板、突き上げ窓をうるし黒塗装、モノトーンだが高級感、色感バランスがすばらしい。

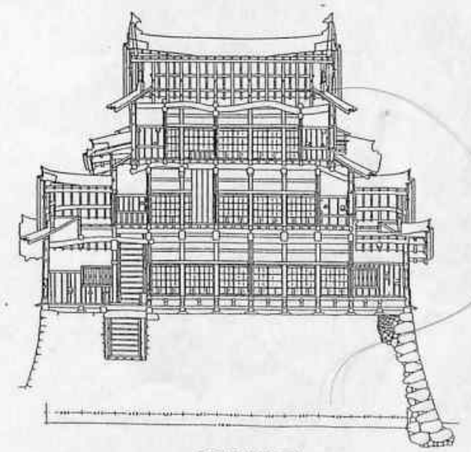
⑥多彩な飾り破風群と窓、廻り縁
１重屋根＝入母屋破風、正面、側面にそれぞれ比翼千鳥破風
２重＝千鳥入母屋破風、唐破風と飾り金具、華頭窓
３重＝軒唐破風と飾り金具、華頭窓、廻縁高欄
大屋根＝入母屋屋根、黄金のシャチ

⑦石垣は高さ５m、打ち込みハギ、微ソリ。荒あらしいが力づよさと美しさ
コーナーには大きめの角石を使用、初期の算木組
天守はテンバいっぱい、土台回しカ、板ひさし（腰屋根）

＊解説シート＝彦根城と城下町の建設は今からおよそ 400年前の慶長９年に始まり、20年近い歳月をへて完成しました。その中心をなしたのが天守のある本丸です。現在の本丸には天守の建物しか残っていませんが、かつては藩主の居館である「御広間」（中略）天守は３階３重、つまり３階建て３重の屋根で構成されています。規模は比較的小ぶりですが、屋根は「切り妻破風」「入母屋破風」「唐破風」を多様に配しており、２階と３階には「花頭窓」、３階には高欄付きの「廻縁」を巡らせるなど外観に重きを置き変化に富んだ美しい姿をみせています。（中略）
戦争とともに発達したお城ですが、彦根城は一度も戦争を経験することなく平和な江戸時代を迎えました。江戸時代には藩主が天守を訪れることも余りなく（中略）城下から見上げる彦根藩の象徴という役割を担っていたようです。







国宝天守

5）国宝天守に入る —— 時間なく自由見学とします

①付櫓と多聞櫓が付属する複合式天守。多聞櫓から入り、鉄張りクギ打ち、壮重な扉の中が天守。地下は階段だけ。慶長時代の建築手法を示している。

＊階段は急だがすべり落ちない工夫もある

②天守１階（母屋部分）２階（破風部分）＝中央部分は身舎（もや）、回りに武者走り。１階身舎は１段高く作られ東の間、西の間の２間、板敷き。敷居、板戸があり、それぞれ独立した居住空間になっている。

＊城主の居住空間を持つ天守を古式または初期望楼型天守という。

③３階（望楼部分）＝身舎は３間×２間、武者走りを回す。

④武者走りの窓や狭間装置、小屋組や梁、柱、地だるき、飛えんたるきなどにも注目

⑤回り縁は高欄を巡らすが飾り。立ち入りはできない。四方の華頭窓から城内や城下、遠くは琵琶湖を隔て、対岸の山々、鈴鹿山脈、近江平野を一望する。

＊彦根城の立地、要害の地を実感する

6）小谷城天守移築伝説もある —— 西の丸三重櫓（重要文化財）を遠望

①本丸の西側一帯を西の丸という。最奥に西の丸三重櫓がある。

②古伝は小谷城浅井氏の移築天守とするが、どうも信じられない

③櫓は南北４間、東西５間、空堀に沿って長さ13間と７間の多聞櫓が接続している。現在、内部を公開しているが遠望だけにする。

④やや急坂の黒門山道を下り、黒門橋を渡ると楽々園と玄宮園に出る。

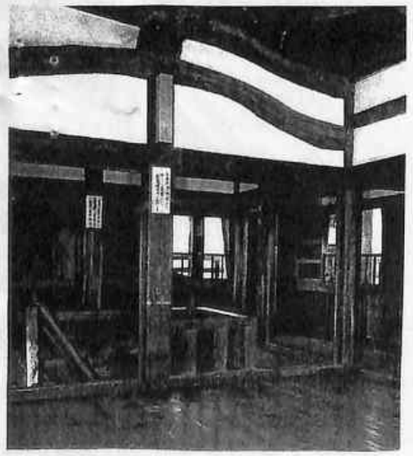
7）池水ごしに天守を見上げる —— 下屋敷庭園玄宮園

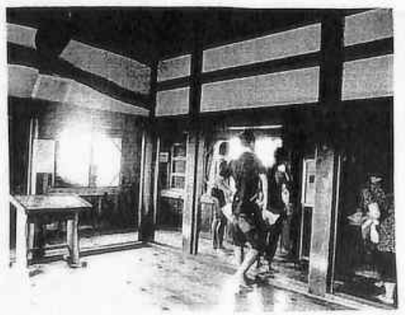
①楽々園は江戸中期、延宝７年４代藩主井伊直興が造営した通称「槻（けやき）御殿」、藩主下屋敷をいう。

＊ケヤキ御殿は改修工事のため現在公開されていない

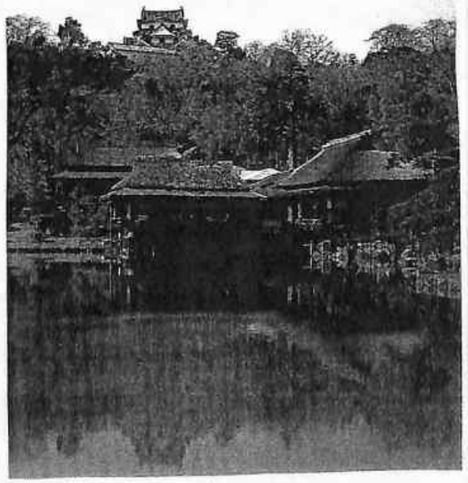
②玄宮園は楽々園の庭で、延宝８年一説に「中国瀟湘八景」また「近江八景」を取り入れて作庭されたという。広大な池水を中心にした「池泉回遊式大名庭園」で、最大の見どころは池、茶室ごしに見上げる彦根城といえる。

③歩足を早めて内堀、佐和門、いろは松をへてバスの待つ「彦根観光協会駐車場」をめざす。





天守の内部



玄宮園

千葉日報（日刊）　2010年（平成22年）8月15日（日曜日）

「石垣」人気が映す現代

「本物」求めて城めぐり

時代の変化、趣向に反映

ニッポン解析

歴史ファンの主道である城めぐりに〝異変〟が起きている。威風堂々とそびえる天守閣がお目当てではなく、これまで注目されることが少なかった石垣の造形美を味わう人が増えているのだ。渋い趣向への変化は、戦後日本の変遷を映し出しているとの見方もある。

■聖地

「日本のマチュピチュ」「天空の城」と呼ばれ人気がうなぎ上りなのが兵庫県朝来市の竹田城跡だ。戦国期の山城で関ケ原の戦いの後に廃城となり、天守閣は未復元。標高約350㍍の天守閣跡に立つと豪壮な石垣が眼下に広がる。信長の安土城築城に携わった職人集団が手掛けたという石の〝芸術〟は、山の頂に築かれたインカ文明マチュピチュ遺跡のイメージに近いと言えなくもない。

妻と訪れた神戸市の50代の会社員黒宮勲さんは「30ほどの城を見てきましたが、ここが最高。頭の中でお城を建てて、当時の人々の生活を想像するのがいいんです」。

竹田城が注目されたのは約4年前。雲海に浮かぶ印象的な石垣の写真がガイドブックや雑誌で紹介され、歴史ファンやアマチュアカメラマンの「聖地」となった。

朝来市商工観光課によると、2009年の来場者は前年比5割増の3万5千人。「50～60代が中心ですが、独りで来る20～30代の女性も目立つ。リピーターが多いのも特徴です」と同課。

富山城では月1回のペースで、富山市埋蔵文化財センターの職員が解説する無料の「富山城石垣ツアー」が開催される。巨大な石が組み込まれているのはなぜか、時代によって変わる積み方の特徴は―。石垣にまつわる逸話に耳を傾ける参加者は100人を超えるときもあり、盛況だ。

「石垣は研究対象として奥が深い」と語るのは、同センターの古川知朗所長。天守閣などは老朽化が避けられないため定期的に修繕が施されるが、石垣は放置されるケースも多い。「陰陽五行説に基づいて配置された石垣もあるし、石に刻まれた文字の解読を試みる研究者もいます」

■主役交代

マニアを魅了するスポットは全国にある。「野面積み」「打ち込みハギ」などの工法が確認できる金沢城は石垣見学のガイドマップを作成。和歌山城はさまざまな種類の石材が使われていることから人気だ。

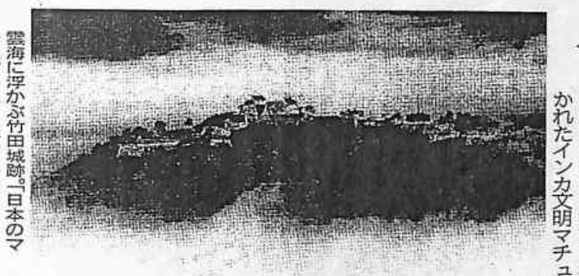
〝緑の下の力持ち〟だったはずの石垣がなぜ、〝主役〟を脅かすほどの人気になったのか。「戦後日本の歩みの中で、人々の趣向が変化してきたことが背景にある」と話すのは城郭研究家の中井均長浜城歴史博物館長だ。

「第1次お城ブーム」が訪れたのは昭和30年代。敗戦の傷が癒え、日本は高度成長の階段を上っていた。「天守閣の復元が各地で進み、富山城や千葉城など、もともと天守閣のなかった城まで門の跡などに模造された。人々は鉄筋コンクリートの天守閣を本物ではないと知りながらも、復興の象徴として歓迎したんでしょう」と中井さん。

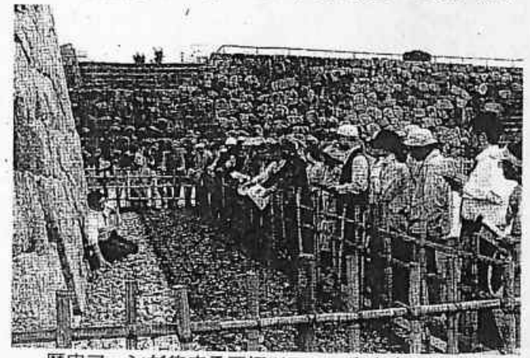
時代は昭和から平成へ。第2次お城ブームが訪れる。鉄筋コンクリートでの復元は影をひそめ、掛川（静岡県）や白河（福島県）などの城は建立当時の工法に近づけるため、しっくいや本瓦が使われた。

「バブル崩壊で、派手で目立つものがよいという感覚が薄まり、歴史ファンの本物志向が強くなったことの現れ」と中井さんは言う。現代に残る城跡の数少ない「本物」である石垣への関心は、その象徴とも言える。

加えて、一見地味な石垣に着目する「視点」が、価値観が多様化する平成の今に受けている。「自分だけは良さが分かるというのが、訪れる人の誇りになっているようだ」と中井さん。こけむした石の一つ一つは、混迷する21世紀に生きる日本人の心を映し出しているのかもしれない。

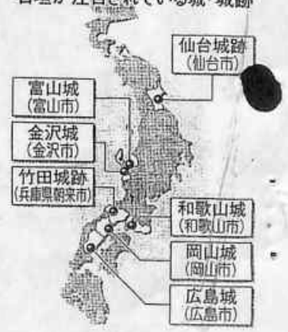


雲海に浮かぶ竹田城跡。「日本のマチュピチュ」と呼ばれる＝兵庫県朝来市（朝来市提供）



歴史ファンが集まる石垣ツアー＝富山市の富山城（富山市埋蔵文化財センター提供）

石垣が注目されている城・城跡

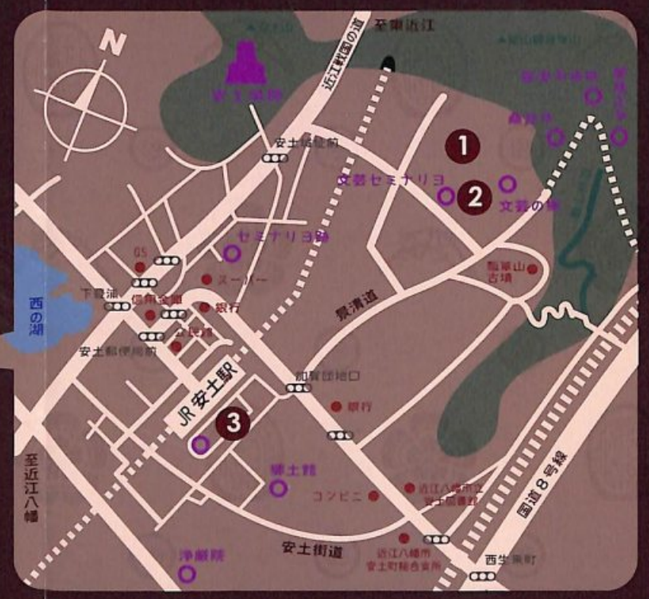


平成２３年ＮＨＫ大河ドラマ「お江（ごう）」

お江（お江与の方）＝織田信長の妹お市と浅井長政の３女。姉は豊臣秀吉の側室・淀（お茶々）と京極高次室お初。浅井家滅亡後、母娘は信長に引き取られたが、やがて母の柴田勝家再婚について北の庄城に移り、勝家、市自害の際に豊臣秀吉に託される。はじめ佐治一成、次いで秀吉の養子羽柴秀勝と結婚、文禄４年秀吉養女として徳川家康嫡男秀忠と婚姻、千姫、家光、忠長、和子を生む。寛永３年没54才。増上寺葬。数奇なドラマは「北の庄城落城」からはじまるか。

信長と安土城の遍歴

1534（天文3年）	尾張の国、那古野城に生まれる。幼名は吉法師。父・織田信秀、母・土田御前。
1543（天文12年）	日本に鉄砲が伝わる。
1546（天文15年）	元服して織田三郎信長と名乗る。
1549（天文18年）	ザビエルがキリスト教を伝える。
1551（天文20年）	信秀が死に、信長が家督を継ぐ。
1555（弘治1年）	信長は清洲城にうつる。
1559（永禄2年）	尾張を統一する。
1560（永禄3年）	桶狭間の戦いで今川義元をやぶる。
1563（永禄6年）	小牧山に城を築き、清洲よりうつる。
1567（永禄10年）	斎藤義興を攻略し美濃の稲葉山城を攻め落とす。井の口を岐阜と改め、岐阜城にうつる。
1568（永禄11年）	信長、足利義昭と共に京に入る。足利義昭が将軍となる。
1571（元亀2年）	比叡山延暦寺を焼き討ちにする。
1573（天正1年）	足利義昭と真木島城で戦い、義昭を追放する。室町幕府が滅びる。浅井長政・朝倉義景を滅ぼす。
1574（天正2年）	信長、上杉謙信に永徳の「洛中洛外図」を贈る。
1575（天正3年）	織田・徳川軍、三河・長篠の戦いで武田勝頼をやぶる。
1576（天正4年）	安土城の築城が始まる。丹波長秀が普請工事を命じられる。
1577（天正5年）	信長、安土を楽市とする。
1579（天正7年）	安土城の天主が完成する。
1582（天正10年）	明智光秀、本能寺の信長を襲う。信長は自刃。安土城の天主と御殿が燃える。
1585（天正13年）	安土城が廃城となる。豊臣秀吉が関白となる。天正少年使節がローマ教皇と謁見。「安土山図屏風」を献上。



安土周辺 MAP

1	2	3	4	5	6	7	8
観音寺城跡	八幡山城跡	彦根城	佐和山城跡	長浜城	小谷城跡	大溝城跡	坂本城跡
近江守護佐々木六角氏の居城。織田信長近江侵攻により滅びる。	秀吉の養子となり関白職を継いだ豊臣秀次が築城。山頂の石垣や近くの八幡掘が見所。	井伊直継・直孝により約20年の歳月をかけて建設され、元和8年（1622）に完成。	石田三成の居城。ほとんどの建造物は彦根城に移築したり破却されたが石垣などが現在も残る。	羽柴（豊臣）秀吉が城主だった城。内部は歴史博物館として公開されている。	浅井長政の居城で、戦国の美女、お市の方とその子（浅井3姉妹）のゆかりの城。	大溝城は織田信澄（信長の甥）が、安土・桃山時代に築城し、城下町を形成した。	明智光秀が築城。城内に琵琶湖の水を引き入れた水城形式で、高い天守閣を持っていた。

信長や安土城の事をもっと知りたい方は

資料多数!! 必見!!

1 滋賀県安土城考古博物館
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦6678
TEL.0748-46-2424

2 安土城天主信長の館
〒521-1321 滋賀県近江八幡市安土町桑実寺800番地
TEL.0748-46-6512

3 安土城郭資料館
〒521-2343 滋賀県近江八幡市安土町小中700番地
TEL.0748-46-5616

安土町観光協会

お問い合わせ
〒521-1343 滋賀県近江八幡市安土町小中700番地
TEL 0748-46-7049　FAX 0748-46-7050
メール　azu7049@zc.ztv.ne.jp

大和66州のど真ん中!!

幻の名城 安土城

多くの謎や思いを秘めた安土城。
信長の夢の続きが安土にある！

- らんまる君と行く！安土城MAP
- 信長と安土城の変遷年号表
- 近江 城めぐり MAP & 安土周辺 MAP

天下人の視界が残る、安土城跡を制する！

安土城跡探索地図

安土城は織田信長公が天下布武の象徴として、天正４年（1576）家臣の丹羽長秀に命じて造らせた城です。琵琶湖の内湖（伊庭内湖・安土内湖）に囲まれ南方だけが開けた地形で、岐阜城よりも京の都に近く、北陸・東海を監視するのに適していたからです。
築城開始からわずか７年後の天正 10 年（1582）６月２日未明、明智光秀の謀反により、信長公は京の都「本能寺」で「是非に及ばず」との言葉を残し、自らの命（49 歳）を絶ちました。６月 15 日誰が火をつけたかわかりませんが、安土城天主が放火され、豪華絢爛な城はあとかたもなく失われてしまいました。

「人間五十年　下天の内にくらぶれば　夢まぼろしのごとくなり」

●城跡：大正 15 年 10 月 20 日　文部省（当時）指定の史跡となる。
　　昭和 27 年 ３ 月 29 日　文部省文化財団保護委員会（当時）が特別史跡に指定。

らんまるくんの安土城豆知識

僕と一緒に「安土城」を探索しましょう♪

1 大手道のひみつ

大手道の石段には、石仏や五輪塔といったお墓の石を使っています。神仏を恐れない人物と思われがちですが、実は合理的な殿の考えるリサイクルです。また、道幅を広くとりまっすぐに配置したのは、帝を迎え入れる時、人々を圧倒するよう「見せるため」に造った道です。

2 謎の空間

大手道の脇には羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）さんと前田利家さんの屋敷があり、秀吉さんの上の郭の奥壁石垣には謎のくぼみがあります。厠？武器庫？隠し部屋？想像を膨らましながらチェックしてみて下さい。

3 信頼の証

この場所には武井夕庵さんの屋敷がありました。夕庵さんは右筆（ゆうひつ）と言って、殿の代筆をしていました。また、お茶の師匠さんでもあり、殿に信頼されていたのです。

4 職人の技

黒金門の石垣の石は、安土城でも最大の石です。大きいものは３トン以上あります。大きな石に耳を当てて、どのようにして運んだのか、安土城を造った人たちの声を聴いてみて下さい。

5 静かに眠る場所

長谷川邸跡の奥には、殿のこども織田信雄（おだのぶかつ）様とその子孫を加えた供養塔があります。織田信長公の血液は脈々と今に残っています。目立たない場所なので見落とさないようにご注意を。

6 天主に隠された意味

「天守」という書き方が一般的ですが、安土城には「天主」の字が充てられています。殿は自らを「天の主」と考え、天主を住まいとしておられました。天主に住んだのは、この後大阪城に住んだ秀吉さんの二人だけです。また、金箔を施したシャチホコが飾られたのも、安土城が最初です。「大和６６州のど真ん中」で静かな琵琶湖を眺め、戦のない世を願っておられました。

三重塔
築城当時のままに残る塔

摠見寺跡南側に、三間三重の本瓦葺きの塔が建っている。棟札に享徳３年（1454）建立の墨書があり、室町時代の建物で、甲賀の長寿寺から移したもの。
摠見寺跡から眺める安土内湖の景色は最高！

信長公御廟
信長の夢と野望が眠る

天主四下の二の丸跡に、羽柴秀吉が天正11年に、信長公ゆかりの太刀、烏帽子、直垂（ひたたれ）などを埋葬して、御廟とした。さらに一周忌には盛大な法要を行った。

二王門（楼門）
摠見寺の山門も今に残る

棟札に元亀２年（1571）甲賀武士山中俊好建立とあり、屋根は入母屋本瓦葺。
門内に安置されている金剛力士像も、頭部内側に應仁元年（1467）因幡院朝作の造像名が残っており、天正年間に甲賀から移築したもの。

大手道
安土城のスケールが想像できる遺構

安土城の入口にあたる大手口から、本丸に向かって一直線にのびる、道幅８ｍ両脇排水溝２ｍ全長１８０ｍの直線階段の大手道。防御ではなく信長公の天下統一を示した「見せる道」にした。

天主跡
この場所は天主閣の地下にあたる

東西・南北それぞれ２８ｍの台地は不等辺八角形の石垣が巡っている。
今では、礎石が１．２ｍおきにきれいに並んでいるだけであるが、地上６階地下１階の天主がそびえ建ち、イエズス会の宣教師ルイス・フロイスによれば、ヨーロッパでも見られないほどの壮大さだと本国への手紙に書いている。
一階部分の石垣からは琵琶湖が望める。

摠見寺（仮本堂）
今は臨済宗妙心寺派のお寺

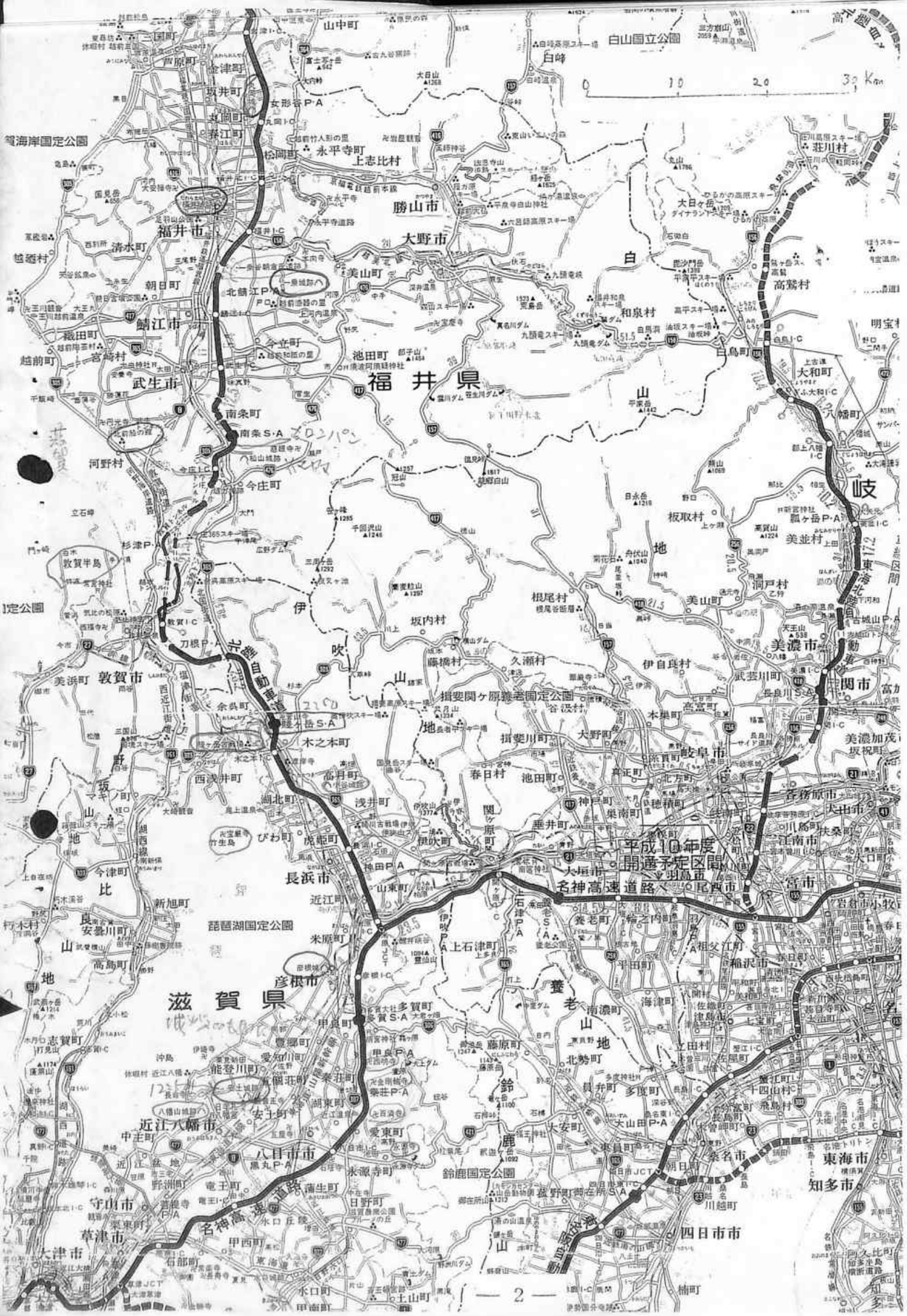
信長公が自らの菩提寺として、他所より移築（安土城本丸西の峰）
安土城炎上時には焼け残ったが、1854 年に焼失し、仮本堂が、徳川家康邸跡に建てられた。寺宝として信長公が使った鉄鍋「まけずのつば」や陣羽織が残っている。

殿は日本人で初めて地球儀を見てすぐに「地球は丸い」と理解したんですよ！

御廟
伝長谷川邸跡
黒金門
本丸跡
伝織田信忠邸跡
摠見寺跡
三重塔
伝武井夕庵邸跡
二王門（楼門）
伝羽柴秀吉邸跡
伝徳川家康邸跡
伝前田利家邸跡
受付

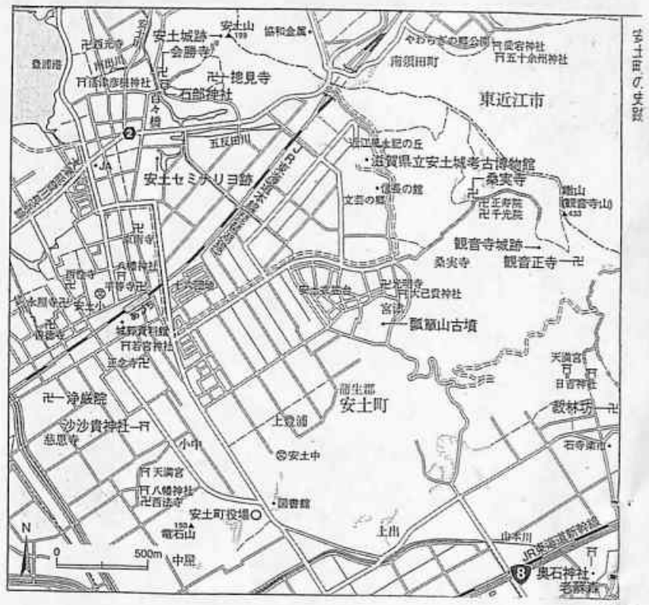
各要所に設置されている案内板や解説版を見ながら探索すれば、天下人織田信長公の偉大さが体感できます。
●所要時間　約６０分～９０分
記述の一部には、言い伝えによる内容の部分があります。ご承知おき下さい。（2010年１月作成）

P 専用駐車場アリ
トイレ 駐車場～受付の間にあります。



1　安土城・城下を歩く

安土城は天正４年（１５７６）の完成からわずか数年で、しかも味方の放った忍者探索の火で城と城下町を全焼している。その後は再建されなかったので、城はともかく、城下は全く何も残っていない。しかし目に見えないものを時に見る、時には感じとることも歴史研究の一面であろう。



【セミナリヨ址】　セミナリヨとは何なりよ

この地に教会がありその中に学校。民衆にも西洋の文物をつたえた。信長の西洋への強い「あこがれ」を無神論者とする説もあるが、私はもつと広く、ヨーロッパの絶対王政への憧れに同意する。

【俗字名にダイウス】　古図にダイウス　近年は大臼

正式な行政地名ではないが今も残っているという。

ダイウスはラテン語の神の転化。

【信長の洋風好み】　安土城天守の装飾や色彩・自身や家来の服装から食物に至るまで。

城下町を重視した

【　楽市楽座をいち早く】

生産や販売を座の独占でなく、自由にする規制緩和をいち早く早く

【琵琶湖の水運を図り京都と瀬戸内海を結んだ

【天下布武の裏付け】　戦力は財力か

永禄１１年年（１５６７）の制札

印章をまねた土産の文鎮

【天下布武を掲げて】戦力は財力

戦国武将の多くは考えた。しかし信長は手紙の印章にまで掲げたという。車も宿もない時代、戦いの成否は武力よりもニギリメシと暖をとるタキギという。その根源は城下町にある。信長の猪突猛進は城下経営の自信からか生まれながらの性格か。

【歴史にｉｆはない】

『もしも（ｉｆ）こうであったら』

信長に　ｉｆ　本能寺がなかったら

考えたくなる。しかし歴史とは事実の連携である。

もしもの仮定が入ったらその時点で物語となる。

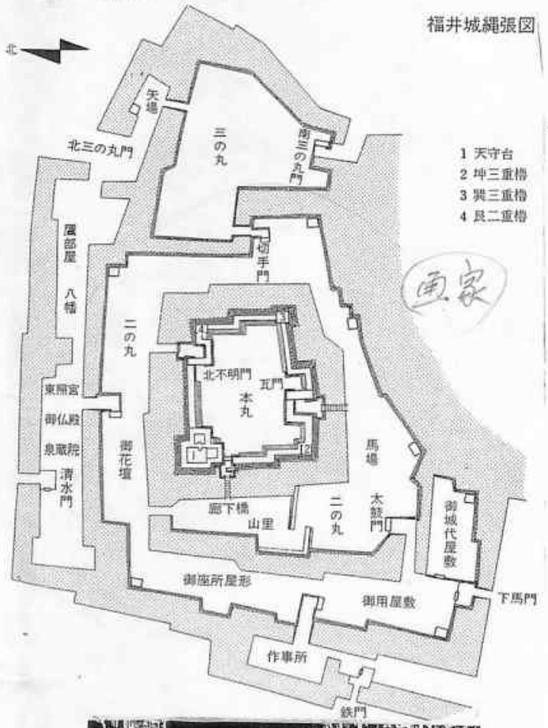
福井城と北の庄城

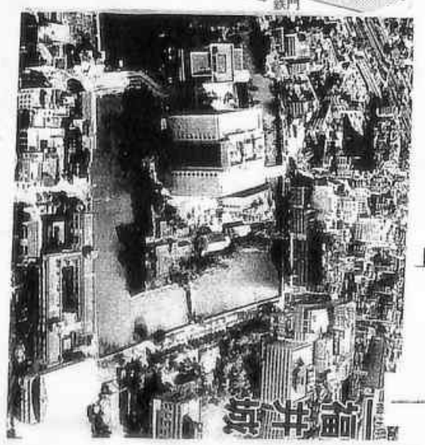
① 柴田勝家による『北の庄城』

越前国は加賀国とともに一向一揆の盛んな地であった。織田信長の命によりその平定に成功した柴田勝家は、足羽川北岸に築城した。その城は五層とも九層ともいわれる壮大なもの。勝家は越前一国を支配した。時に天正３年（１５７５）である。

しかしそれも数年、羽柴秀吉に屈しさらに関が原合戦後の國替えで一変し、福井城にくりこまれる。現在は往時の天守の位置が柴田神社で勝家の像と発掘された当時の家の銅像と並んで発掘で検出した当時の石の一部が展示されている。

福井城縄張図





北の庄城想像復元図

② 小さくなった大きな城 福井城

やがて慶長５年（１６００）の関が原合戦、大勝した家康による國替えで、関東の結城で１０万石の次男の秀康を、何段階もの飛び級で３２万石の福井を与えた。城は築城の名人とされる藤堂高虎をはじめ有力な諸大大名に命じての天下普請である。

こうしてできた城は本丸を中心に輪郭式に二の丸・三の丸・珍しい四の丸を配し、水堀は天然の川を当てるほか、場所によって四重とも五重とも数えられる配置である。

櫓は本丸の西南隅に四層の天守のほか本丸の三隅に隅櫓など、壮大な城であった。しかしわずか５０年余り、寛文９年（１６６９）城下からの大火で全焼、その後は再建されなかった。

大まかな計算だが今は本丸だけなので、まん中だけ往時の何分の一かがのこっていることになる。

私はこれを「外欠け型の城」と呼ぶ。

ついでにあげれば

「全欠け型」新潟県　長岡城

「半欠け型」山梨県　甲府城

「片欠け型」新潟県　新発田城 半分自衛隊

など私の特許（申請していない）

上の地図と方位を合わせて

③ 福井城を歩く

バスの駐停車がどこでできるか不明だが、できれば電気ビルや水産会館付近で下車したい。

◎見所１（堀端で）　内堀・石垣・横矢をみる。

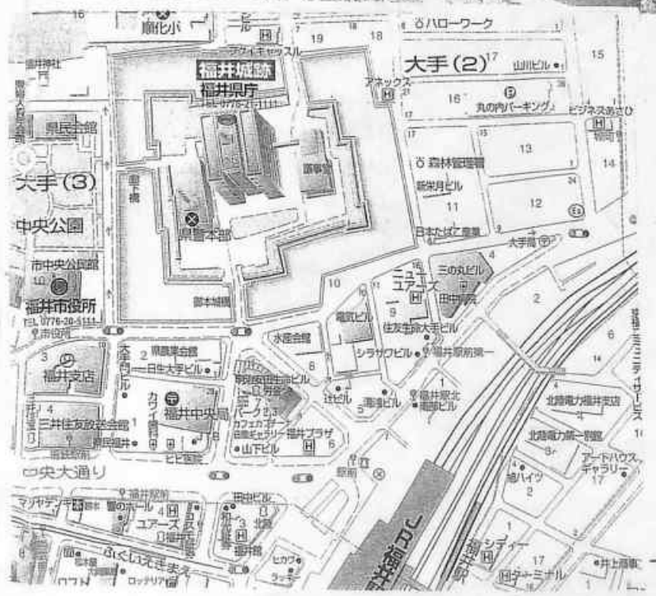
◎見所２（御本城橋で）もちろん現代の橋。往時はどんな橋であったか想像してみよう。（橋は鳥かん図では図の下部の矢印）

◎見所３（本丸大手門）①門の形式を見る、もちろん㊀㊁㊂㊃形式だろうが。

②瓦門とは　金沢城の鉛瓦・丸岡城の石瓦など寒冷地では独特の瓦。この城もか。

福井城本丸南面　本丸大手にあたる瓦門を見る

鳥かん図



◎見所４　福の井の跡

城名ははじめは北の庄城、だが北は敗北に通じるからと、福の井戸とよばれていた井戸の利用とともに雅字の福居のちに福井と改めた。

◎見所５「よくぞ残れり天守台」

江戸初期の大火・明治の廃城・昭和の地震を耐えぬいて、あの巨大であった城を代表しているのか。

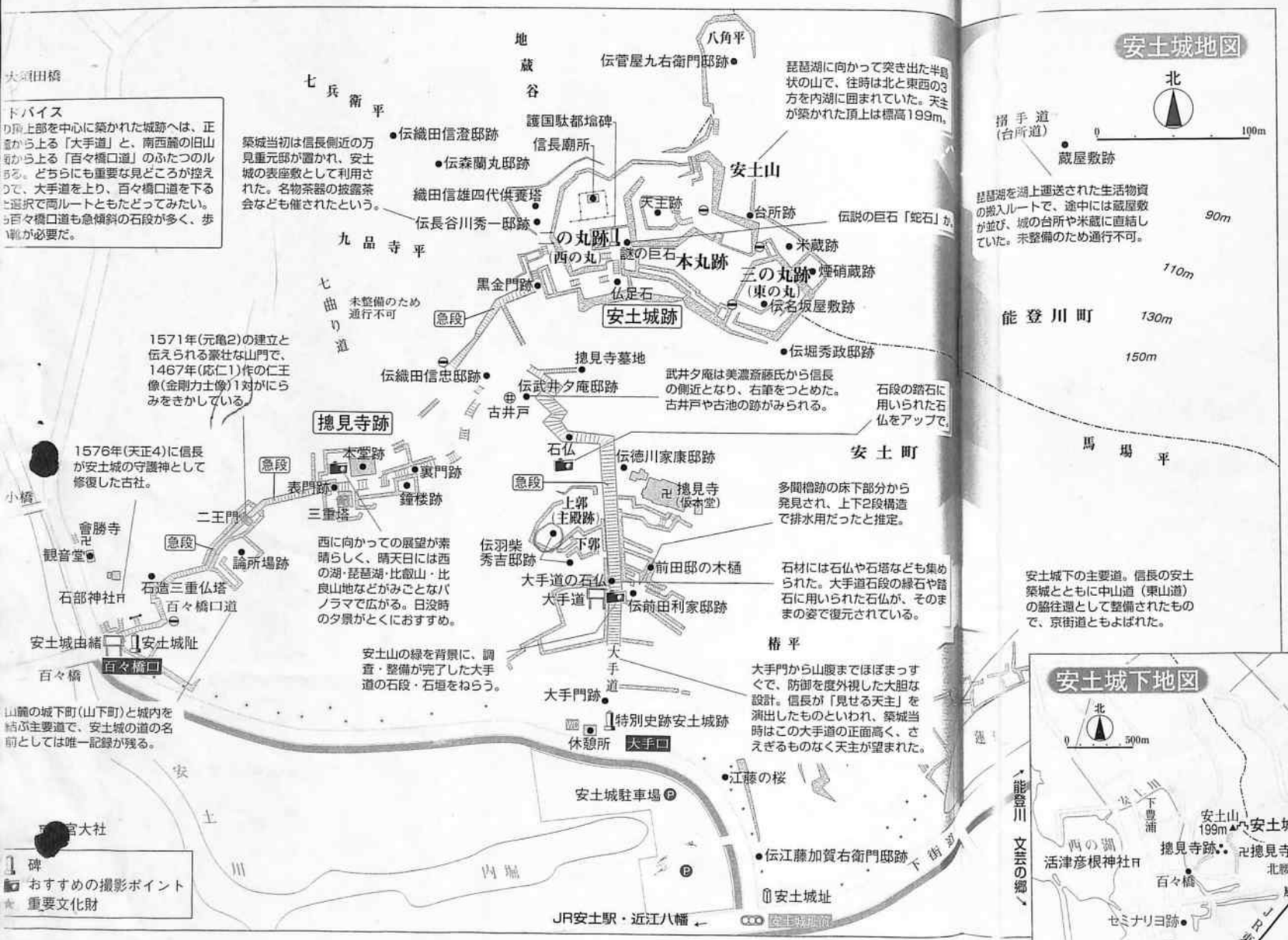
（位置は現代図の左上の矢印県庁の隣）

◎見所６　廊下橋を渡る

廊下橋という形式の橋の跡で現代の橋

今まで廊下橋は栃木県・京都の市内・京都郊外の薗部城でみてきた。ことばの上ではなく、映像として頭に浮かべられるか。屋根と壁のある橋。何のために。

（福井城終了　バスに乗る）



安土城下の主要道。信長の安土築城とともに中山道(東山道)の脇往還として整備されたもので、京街道ともよばれた。

行事ごよみ —安土町—

- 3月下旬～4月上旬　江藤の桜の花見　安土城址
- 4月上旬　沙沙貴まつり　沙沙貴神社
- 中旬～下旬　千日会　岩戸山十三仏
- 6月上旬　あづち信長まつり　文芸の郷
- 8月上旬　西の湖花火大会　西の湖畔
- 10月体育の日　近江源氏祭　沙沙貴神社
- 11月上旬　ふるさとふれあい秋まつり　文芸の郷
- 中旬　観音寺城イベント　観音寺山麓石寺

沙沙貴まつりの宮入り　写真／安土町

＊本書に掲載の地図は、国土地理院発行の1万分の1地形図・2万5000分の1地形図・5万分の1地形図・20万分の1地勢図および各自治体発行の都市計画図を使用しました。

&インフォメー

Access and Information

合わせ先
振興課
-46-7201
案内所
-46-4234
城郭調査研究所
-46-6144
信長の館
-46-6512
資料館
-46-5616
サイクル
-46-2072

安土観光レンタサイクル
☎0748-46-3202
安土駅前レンタサイクル
☎0748-46-3266

●交通ガイド
ＪＲ東海道本線（琵琶湖線）安土駅から、百々橋口まで徒歩20分、大手口まで徒歩25分。安土城天主信長の館・安土城考古博物館へは、大手口から徒歩10分、安土駅から徒歩25分。

●駐車場情報
大手口前に安土城駐車場があり、150台収容（花見期間のみ有料）。

所在地　安土町下豊浦6678
電話　0748-46-2424
開館時間　9:30～17:00
（入館は16:30まで）
休館日　月曜（祝日を除く）、祝日の翌日（土曜・日曜を除く）、12月28日～1月4日

滋賀県立安土城考古博物館

近江風土記の丘にあり、「城郭」をテーマにした展示が充実。復元模型・映像シアター・コンピュータ検索など最新システムの展示・解説で、安土城と信長の全容に迫ることができる。安土城の地上5階と6階部分を推定復元した「安土城天主信長の館」（文芸の郷内）が近接。

『彦根城』　　全部でなく入口の平地の部分だけ

（1）佐和口から入る

表門と扱われているこの門の他に、大手門もある。関が原合戦の戦功から佐和山城をあたえられたが，「もはや山城の時代ではない」とこの城を築いたことは知られている。しかし「これからは城は防衛よりも行政」と考えた結果双方の門にしたと私は考える。

（2）いろは松

いろは４８本の松があったという。しかし江戸の町火消組には「ひ・ら・へ」の組はなく、反対に姫路城には珍しい「への門」がある。つまり多くは「いろは」ではあっても４８ではない、多数ということか。

（3）珍しい馬屋が文化財

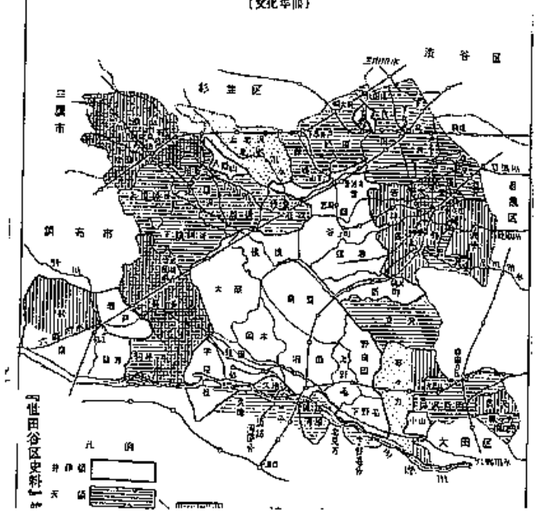
藩主の馬十数頭とそれを扱う下級藩士の住居。お馬様のお屋敷といっても現存は全国唯一なので国の重要文化財に指定されている。

（4）表門橋を渡る

ここから先がこの城の主要部分　　山岸常任講師にお願いする

（5）参考　彦根藩の飛び地は世田谷にも

井伊家の領地は元来は高崎の近く。慶長５（１６００）年の関が原の合戦で戦功を挙げ、石田三成のいた佐和山の地へ移った。しかし力量を認められて江戸定府となり、霞が関の今の国会議事堂の前庭の地に上屋敷、赤坂に中屋敷、今の明治神宮の敷地に下屋敷が与えられた。それへ勤める１００名にも及ぶ藩士の賄い領として今の栃木県佐野と武蔵国世田谷とが与えられた。佐野は主に米と燃料を世田谷は野菜を納めることが年貢であった。しかし世田谷は藩屋敷に近いので運搬などの使役のほか、公式行事の際の槍持ち人足を勤めることもあったという

（右図で彦根藩領は中央の白抜き部分）

世田谷支配関係推定図
（文化年間）